

特211
799



1

0029928-000

特211-799

生命保険図鑑解説

麻生郁雄・著

保険経済研究社

昭和13

ADJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

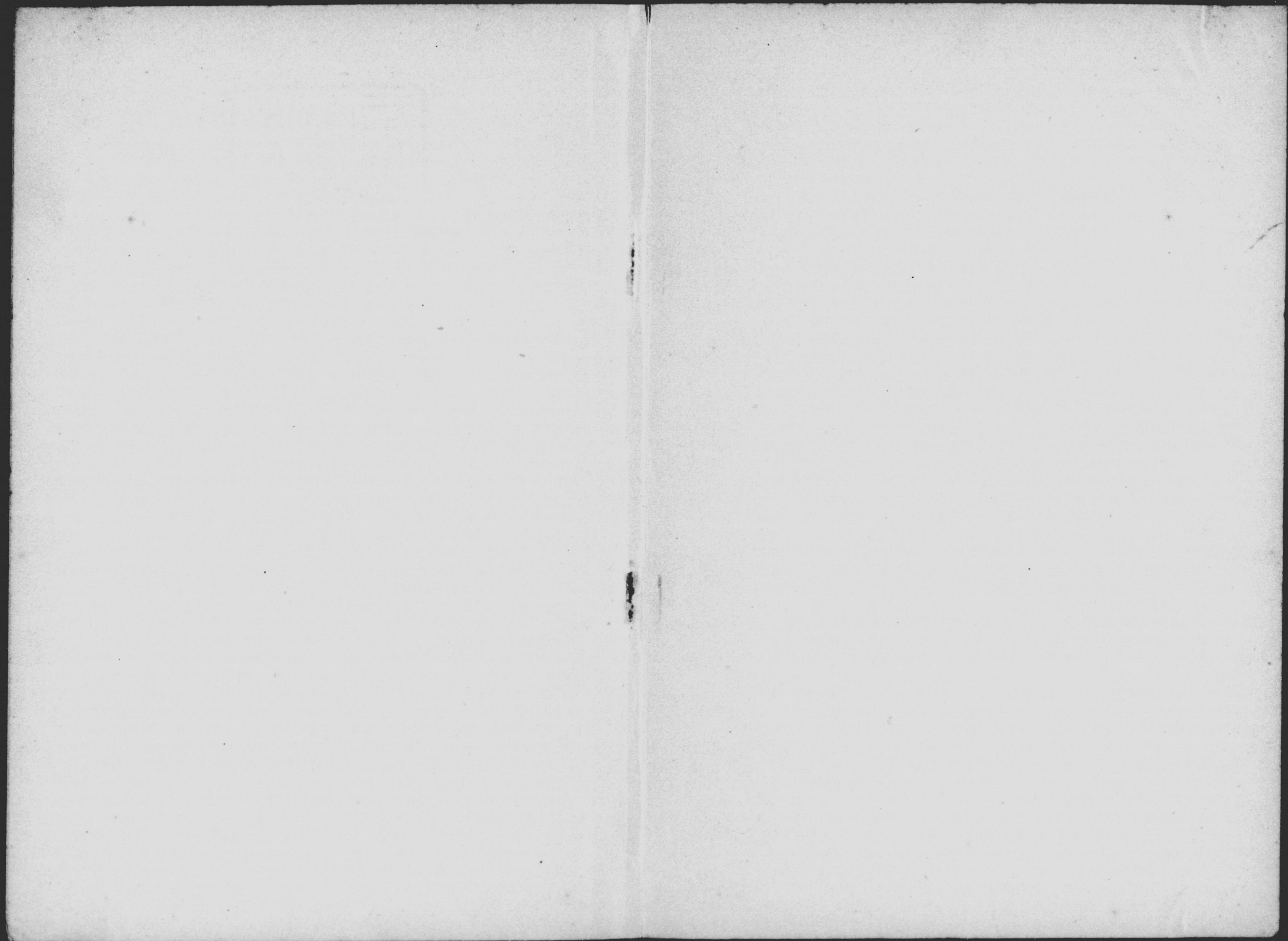
特211

799

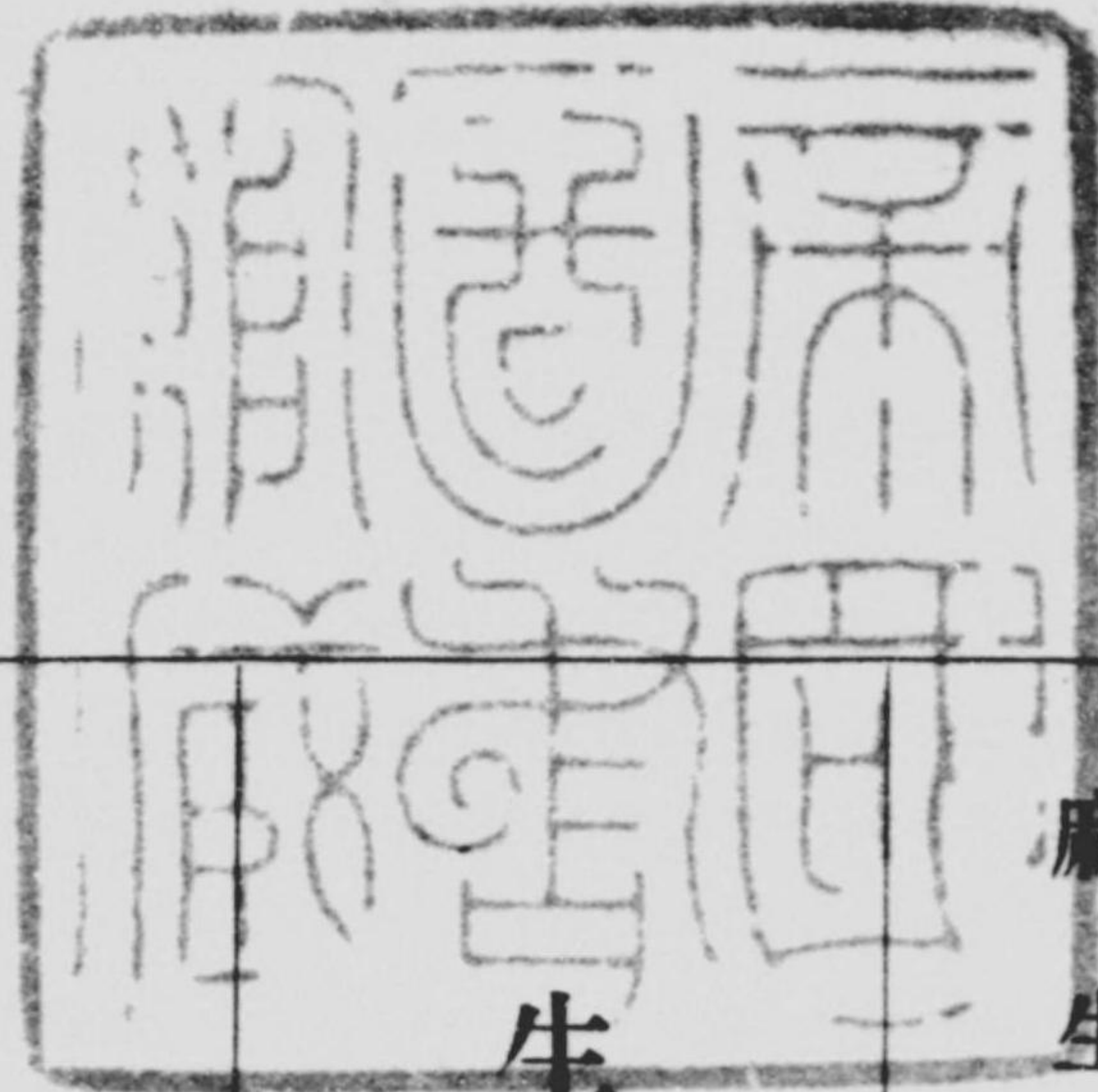
麻生郁雄著

生命保險圖鑑解說

保險經濟研究社發行



特211
799



麻生郁雄著

生命保險圖鑑解說

保險經濟研究社發行



序

今日では生命保険といふ名稱は誰でも知つてゐる。然し眞の生命保険を知つてゐるものは少ない。ところが、いざ生命保険の眞の姿を説明するといふことになるやと仲々説き難いものであるが、これを圖繪等により直接眼に訴へれば比較的容易にその目的を達することが出来る。この目的のために生れたのが「生命保険圖鑑」である。

生命保険圖鑑は第一部に於て生命保険の必要性を、第二部に於て保険選擇の方法を、又第三部に於て保険金の増額方法を述べてある。従つて、第二部及第三部は生命保険の實質を説明する材料であると同時に、教育資料としても使用し得るやう苦心編纂した。

然し、如何なる武器も之を實際に活用しなくては一介の反古に等しい。而して、之を縦横に活用して最後の榮冠を得るには、豫めその内容を充分研究して置かねばならない。本解説書を諸賢の座右に送る所以は、全く研究の好

伴侶たらしめんとする老婆心に外ならない。

近時生命保険の知識は相當普及し、募集上の競争も亦極めて複雑となつて來たので、これからの良き保険人はどうしても深い知識を持たねばならぬ。著者は之を痛感し確信する故に、何人にも解る様、しかも必要な知識は剩すところなく記述することに努めた。願はくば本書が各位の才能に一層の力を増すことに役立つよう衷心希望する次第である。たゞ、著者非才にして不備誤解の點なきを保し難いが、幸ひにして諸賢の御教示により、次の機會に於て完璧を期したいと思ふ。

尙ほ、本解説書本文中の標題が生命保険圖鑑と相違するもの、又は順序の顛倒するものがあるが、それは解説の都合上によるもので、著者の我儘に對しては特に御寛恕を乞ふ。

著書識

生命保険圖鑑解説 目次

緒言..... 解説書頁 圖鑑頁

第一部 生命保険には次の様な意味があります

一、保険は慈愛..... 五(五—九)

學資の準備(五) 結婚費用の準備(七) 大學卒業のお祝として絶好の贈物(七)
人生のスタートに生命保険を(八)

二、保険は安心..... 八(一〇—二)

三、保険はたのしみ..... 九(一三—一四)

老後の安定(九) 百圓の月收を得る方法(九)

四、保険は有利..... 二(一五—一九)

投資の基本條件(二) 保険の利廻(二) 投資物の税引利廻(二) 貯金と保険との比較(三) 明暗二筋道(三) 生命保険と定期積金(四) 保険料に對する所得税免除(五) 相続税の準備(五) 一時拂保険と定期預金(七) 資

目次

金の活用(一八) 退職資金を減らさない方法(一九) 収入向上期に一生の基礎を固める(三) 簡易保険と生命保険(三)

五、保険は信用……………三(三〇)

第二部 それではどんな保険を撰べばよいか

第一章 良い会社の条件は？

保険撰擇の標準(三) 良い会社の条件(三)……………(三)

一、固い基礎……………三(三一―三四)

相互會社と株式會社(三四) 相互組織の理想と現實(三五) 相互會社に優る株式會社(三六) 傳統の力(三七)

二、厚い信用……………七(三五)

安田財閥の現勢(三七)

三、堅實な資産……………六(三六―四三)

資産と投資(三八) 資産運用方法の優秀性(三九) 資産利廻と市中利廻との比較(三〇) 加入者の資産(三〇) 利益金の源泉(三一) 利差益(三二) 死差益(三二) 費差益(三三) 解約益(三三) 利益金處分方法(三四) 株式八社利益金處分の實

際(三四) 株主配當と役員賞與(三五) 相互會社と役員賞與(三五) 保險金の支拂能力(三六) 利益配當金の支拂能力(三七)

四、確實な進歩……………七(四四―四六)

會社經營の確實な進歩(三七) 圖鑑四四、四五頁の用語説明(三八) 會社經營の堅實性(四一) 事業費率(四二) 収益率(四三)

五、優秀な契約内容……………四(四七―四八)

優秀な契約内容の条件(四四) 早期死亡の少ないこと(四五) 實際死亡率の低いこと(四六) 失效解約の少ないこと(四七)

第一章の結論……………七

第二章 良い保險の条件は？

良い保險の条件……………四

一、安い掛金

(1) 保險料の仕組……………四(四九―五二)

死亡生殘表(四九) 商工省日本經驗生命表(四九) 死亡生殘表の比較(四九)

純保険料とは？(四九) 豫定利率(五〇) 純保険料の概念(五一) 附加保険料(五二) 營業保険料(五二) 純保険料の計算(五三)

(2) 加入者利益配當……………五(五—五七)

高率配當の最高峰(五四) 加入者利益配當率の變化(五五) 昭和新種養老の配當方法(五五) 正味利得金(五六)

(3) 掛金の他社との比較……………五(五—五七)

合理的な栽培法……………日本生命との比較(五七) どの線路を選びますか(五八)

十大生命正味掛金の比較(六〇) 第一の出世保険との比較(六〇) 出世保険とはどんなものか(六一) 出世保険の配當金計算方法(六一) 第一の八十五歳満期と安田の八十歳満期との比較(六四) 日本生命の八十五歳満期と安田の八十歳満期との比較(六五) 千代田の七十五歳受取と安田の三十年満期との比較(六五) 日本生命の短期拂込保険と安田生命の比較(六五)

二、有利な約款

約款研究の必要性(六八) 約款の比較(六九)……………(七)

至れり盡せりの加入者本位

五分の三拍子……………六(六—七)

約款の五大特長……………七(七—七)

一、拂済證券……………七(七—七)

二、振替貸付……………七(七—八)

振替貸付方法と利用價值(七三) 振替貸付が満期まで繼續出来る最短拂込年數(七三) 圖の見方…圖鑑七七頁(七四) 振替貸付の計算方法(七四) 振替貸付金元利合計及受取金一覽表の見方(七五) 拂込年數より見たる振替貸付満期手取金(七六) 正味手取金一萬圓保險(七八) 二年掛—五年掛保險(八〇) 振替貸付他社との比較(八二) 七年拂込後振替貸付の手取金比較(八三)

振替貸付と延長保険の説明(八三)……………(八九)

三、延長保険……………八(八—九)

延長保険とはどんなものか(八三) 延長保険の計算(八四) 延長保険の圖解(八七) 延長保険は何年掛ければ満期まで有効か(八七) 延長保険他社との比較(八七)

四、保険料の一時拂……………八(八—九)

割引法と生存法(八八) 割引法と生存法の優劣(八八) 割引一時拂保険料の分解(八九) 割引一時拂保険料の積立方法(九〇) 割引一時拂の圖解(九一) 割引一時拂の利益配當(九二) 割引一時拂の實際(九三) 一時拂・日本生命との比較(九四) 一時拂・帝國生命との比較(九五) 利差配當の解説(九六)

五、保険金の分割拂.....九五(一〇三)

第二部の結論.....九六

第三部 保険金の増額方法

乗換の利得.....九七(一〇三)

一、拂濟保険利用の保険金増額方法.....九八(一〇四-一〇七)

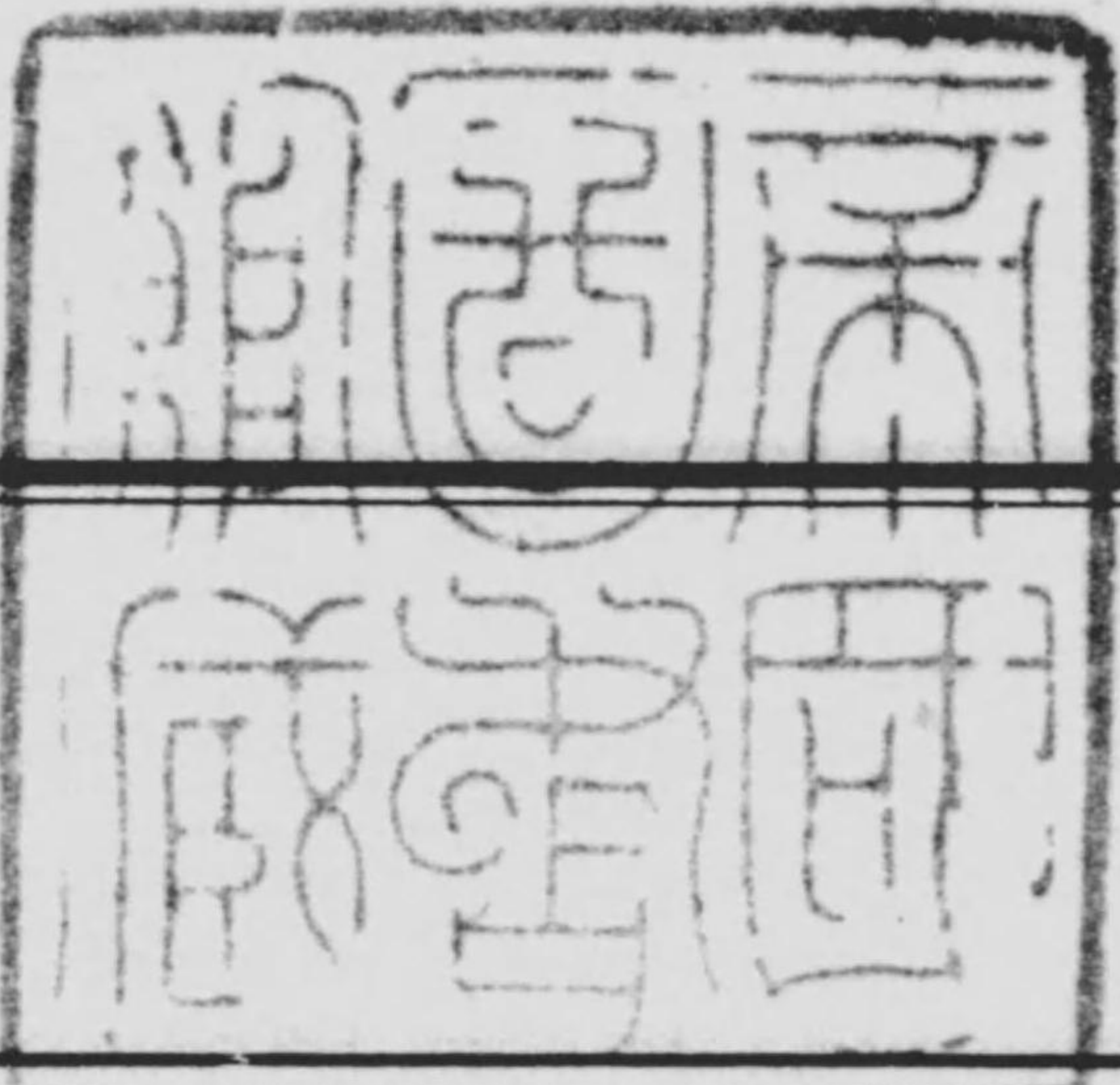
第一生命の場合(九八) 明治生命の場合(一〇〇) 千代田生命の場合(一〇一)

二、振替貸付利用の保険金増額方法.....一〇一(一〇八-一一三)

千鳥掛(一〇二) 住友生命の場合(一〇三) 帝國生命、三井生命の場合(一〇四)

三、解約返戻金利用の掛金節減方法.....一〇二(一一四-一一五)

結論.....一〇三



緒言

緒言

生命保険圖鑑解説

これから生命保険圖鑑の頁を逐つて、生命保険の大切なこと、どんな保険がよいかといふこと等についてお話しませう。

さて解説に入る前に一言御話して置きたいことは、生命保険が何故こんなに大きな勢力になつたのであらうかといふことです。我國で初めてこの制度の誕生を見ましたのは、明治十三年初代安田善次郎翁發起の『共濟五百名社』でありまして、當時はその名の通り加入者は五百人で、會員中死亡者のある度に一人二圓宛を出し合つて、遺族に贈るといふ簡単な制度でありましたが、その頃からまた六十年と経たない今日、生命保険加入者は日本全國に約一千一百万を算へ、保険金額は約百七十億圓に及ぶといふ偉大なる事業になりました。これは何のためでせう。それは共濟五百名社設立の趣旨の中に高らかに叫ばれた相互扶助、共存共榮の精神が、我國の各方面の人々の胸にこの事業發展の種子を播いたためであります。その趣意書を述べてみませう。原文は當

時のことですから漢文口調ではありますが、現代文に直して述べてみませう。

共済五百名社設立趣旨 (譯文)

吾々がこの世に生き抜いて行くためには、どれだけの浮沈苦樂を味はねばならぬかわかりません。或は天災あり、或は地變があるでありませう。然し、それらの天災地變は、何とか免れ得ないでもありませんが、どうしても逃がれることの出来ないのは壽命であります。父と呼ばれ、母と親しまれる人々が、死に臨む時、後には幼弱な子供達が遺る、家には財産もない、自分が死ねば子供達は孤兒になる、一體どうして暮して行くだらうと考へると、死ぬに死なれぬ想ひでありませう。

人の命數は測り難いものでありますから、かういふ不幸は避け難いのであります。此處にこの不幸を救ふ道があるのであります。吾々はそのために共済五百名社を設立しようとする次第であります。

抑もこの五百名社といふのは外國の生命保險会社とは多少異なる點もありますが、慈惠を第一主義とし、有志の者が同盟して一社を結び、社中に死者のあつた場合に、遺族に金員を贈つて生計の資とし、遺族が悲しみの中にも將來に對して希望を持ちうるやうにし、死んで行く人にも、死んでも死に切れぬといふやうな敷きを決してさせぬやうにしようとするのであります。(下略)

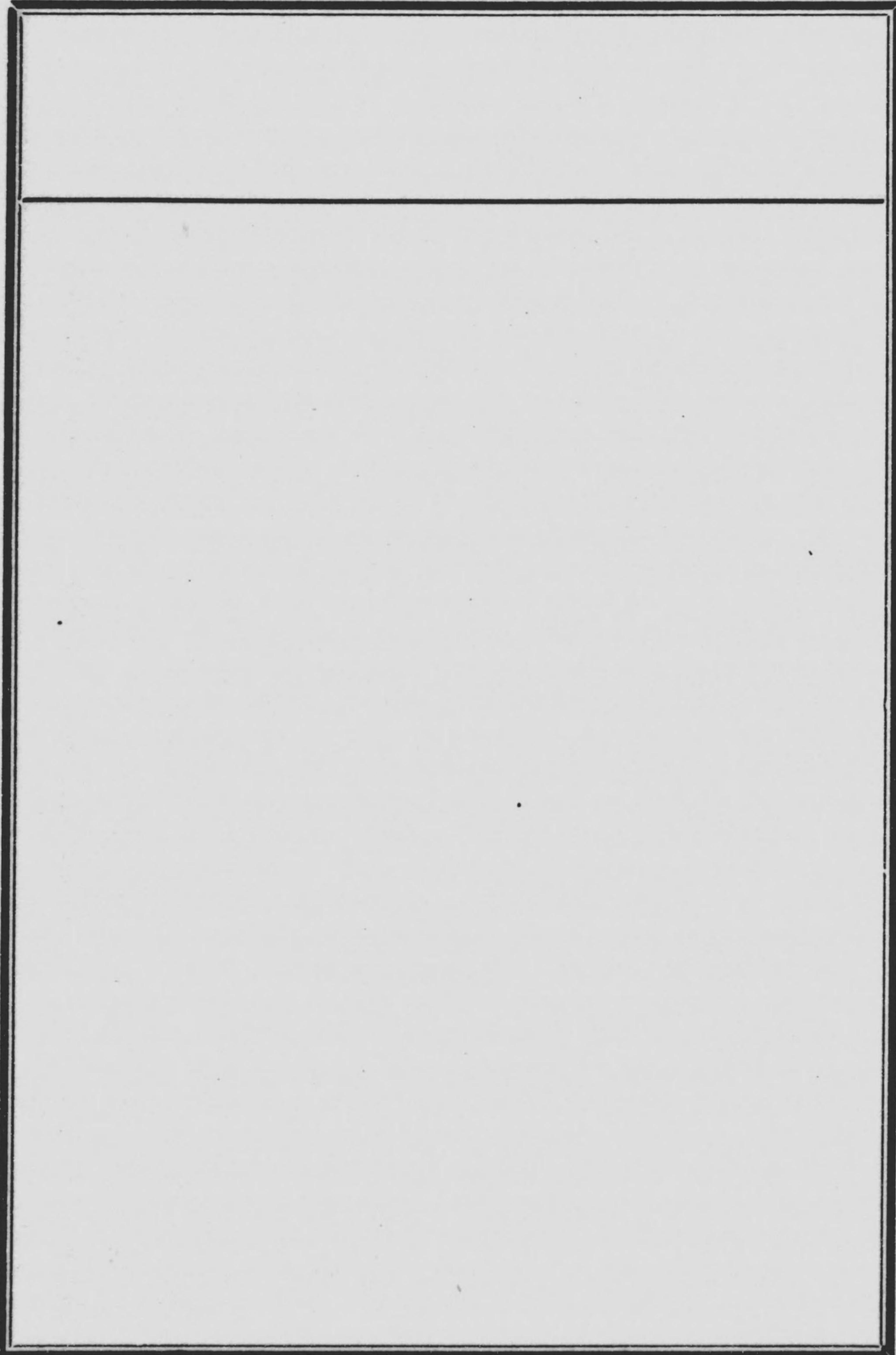
此短い文章の中に感じられる暖い慈愛の精神が生命保險の根本です。かういふ慈愛の精神の上に立つ事業であればこそ短い年月の間にこのやうな大發展をこげたのであります。そこで我々は先づ最初に、このところをよく腹にすゑて、仕事をしなければなりません。波風多き人生は多くの人が手を繋ぎ合つて行くとき始めて心強い平和な日が送れるのであります。

安田生命監査役元商工大臣法學博士松本盛治氏が

『保險は多數人が少額の醵金をして共同の準備財産を作り、不幸の厄神を撃退する方法として工夫された經濟上の仕組であつて、即ち保險は、自然現象的偶然を文化的施設を以て征服するものである。ここに保險の本質がある』と云つて居られる所以であります。

圖鑑屏繪の寫眞は、赤ん坊の手をいたはつてゐる父親の頼もしい愛の手です。この手を見てゐますと、人生の美しさ、暖さに觸れる思ひがするではありませんか。

以上で生命保險の根本の思想を簡単に御話しましたので、次に本論に入りたいと思ひます。



生命保険
の意味
(圖鑑二、三頁)

保険は慈
愛

學資の準備
(圖鑑五、六頁)

第一部

生命保険には次の様な意味があります

圖鑑第二頁と三頁を見開きに見て下さい。生命保険は前述の様に慈愛の精神に基いた文化的施設であります。その内容を少し詳しく分解してみますと、第二頁にあるやうに慈愛・安心・たのしみ・有利・信用の五つとなります。それはどういふわけか、一つ一つ順々に御話して行きませう。

保険は慈愛

第一に保険は慈愛です。保険はいろいろな働きで愛兒を護り育てます。その中で最も大きい働きは、子供に充分な教育や結婚の準備をする働きです。子供の教育は親としての義務です。親としてこの義務を果たすためには豫め學資の準備をして置かねばなりません。

先づ學生の就業状況を調べてみますと、第五頁のやうに小學校卒業者千人のうち大學を卒業す

る者は僅かに八人しかないといふ有様です。又折角大學に入學しても、途中で退學しなければならぬ者が澤山ありますが、そのうちの七割三分までは學資缺乏が原因となつてゐます。結局計畫的なシツカリした準備が出来てゐなかつたからです。然らば、どんな方法で準備すればよいかといふことになりませんが、それには生命保険を利用するのが一番確實でもあるし、又一番有利でもあるのです。

そこで一體如何なる方法により幾ら準備すればよいか、といふことを研究したいのですが、その前に學資は幾ら要るかといふことを調べてみますと第六頁に掲げてあるやうに、中學から大學卒業までには五千七百六十圓要ります。先づ中學は自宅通學のため大した苦勞のないものとして、高等學校から大學卒業までの學資約四千圓だけは必ず今から準備して置かねばなりません。それには先づ三千圓の生命保険に加入し、満期に受取るべき保険金はそのまゝ會社に預け、保険金分割拂の方法（圖鑑第一〇二頁、本解説書第九五頁参照）を利用すれば毎月保險會社の方で學資金を出して呉れます。斯うして置きさへすれば、何時家庭に不測の災害が起つても學資だけは少しも心配がありません。

第六頁には學資準備の方法として、子弟が十歳の時十年満期保險金三千圓に加入した場合と、父が三十歳の時（子供の生れた年）二十年満期に矢張り三千圓加入した場合との二つの例を示して置きました。掛金は表の通りですが、満期受取保險金三千圓を分割拂にしますと同頁下表のや

結婚費用の準備
（圖鑑七頁）

うに高等學校から大學卒業までの六年間毎月四六円〇五圓づつ受取ることが出来ます。この分割拂に對しては第三年目から毎年利息配當が付きませんが、これを月割にしますと最初の年は一円七二圓、次の年は一円三二圓といふ風になります。尚ほ又、満期及満期後配當は年三分五厘の利率で利殖しながら學資の不足分を補充することにしますと月額表の通りになります。分割拂の月賦金と利息配當の月割額と満期後配當の月割額とが毎月の學資金となります。斯うしますと、高等學校が平均五〇円、大學が平均六〇円の學資は、譯なく作ることが出来ます。

お嬢様に對してはお嫁入りのお支度を、親として今から考へて置かねばなりません。即ちお嬢様がお生れになつた時からすぐ準備しますと非常に榮々と御支度金が得られます。一日僅かに六圓八圓即ちバット一個分にも當らない僅かな金で二十年後には一千圓のお嫁入りのお支度が出来るのであるのです。

掛金は第七頁のやうになります。さうして満期及満期後の配當金は何かの豫備金としてお役に立ちます。是非今直ぐ御實行されるようお勧めしたいのです。掛金の圖の見方は圖鑑第五十五頁本解説書第五五頁を参照して戴きたい。

又安田生命の一時拂保險は大學卒業又は結婚のお祝として絶好の贈物となります。子弟が二十五歳の時二十五年満期保險金一萬圓の一時拂保險をお贈りしますと第八頁のやうになります。表の見方は一時拂保險の項（圖鑑第九六頁、本解説書第九一頁参照）に譲ることとし、この表中一時拂

大學卒業、結婚のお祝として絶好の贈物
（圖鑑八頁）

保険料、配当金を三分五厘で利殖した元利合計、及び満期手取金の三つを第八頁の圖に就いて説明します。

さて、最左端の青線は一時拂保険料の六、〇九五円六〇銭です。配当金は第六年目から現金で支拂はれますが、これを年三分五厘で利殖しますと各年度末には赤線のやうになり、満期には配当金の元利合計五、六四五円二六銭、満期及満期後配當の満期時に於ける現價二、二〇六円九三銭（現價については本解説書第五二頁参照）、保険金一萬圓の合計額一七、八五二円一九銭が手取金となります。斯様に一萬圓の保険金が約二倍となつて贈られるわけですから、子弟への贈物としては絶好のものと言ふことが出来ます。

生命保険はどんな人にとつても必ず必要なものですが、とかく若い中は俺は死ぬものか、保険なんかは弱者や老人の考へるものだと、まるで自分達には無關係なものゝやうに考へ勝ちです。世の父兄先輩各位は是非共御慈愛を以て若い人々に保険の意義を理解させてあげて下さい。最近、愛兒が成長して就職したり結婚したりする際に保険加入をすゝめ、或は最初の掛金を拂つて證券を與へるといふやうな親御さんが増えて來てゐるのは誠にうれしい現象です。

保 險 は 安 心

緒言にもありましたやうに無常朝露の如き人生にあつて、一家の責任者たるものが安心して仕

人生のスタートに生命保険を
(圖鑑九頁)

心 保 險 は 安
(圖鑑一〇、一一頁)

保 險 は た
の し み

老後の安定
(圖鑑一二頁)

百圓の月収を得る方法
(圖鑑一三、一四頁)

事に全力を打込むためには生命保険によつて後顧の憂をなくすることが必要です。誰も考へたくないことですが、すべての人が百歳の壽を保つことは仲々困難で、第十頁の如く壯年の時、志半ばにして世を去る人はかなりの數に上ります。病氣になつてから又は年老ひてからは、加入したいと思つても會社の方で御引受致しません。御壯健なうちに、一日も早く一家の眞の平和を御求め下さい。

保 險 は た の し み

又、生命保険はたのしみです。最初に樹てた保険金の目的額に歩一歩近づいてゆき、永年のたゆみない努力で嬉しい保険金を受取り、豊かな氣持で平和な楽しい生活を味うといふことは一番幸福なことです。この幸福を味はへず年老ひて生活の安定なく、人の世話をうけ不自由な生活をする人が世の中には餘りに多くありますが、働き盛りの時に、ここをよよく考へられて保険の準備をなされた方には、春の如きなごやかな御生活が待つてゐるのです。

斯様に生命保険は家庭の保護、老後の安定等人生には缺くことの出来ないものですが、それではどの位の金額の保険に加入すればよいかが次の問題となります。そこでその一つの標準として二十年間毎月百圓の収入を確實に受取るにはどの位の保険に入ればよいかを見てみませう。その保険金額は一萬六千圓で充分です。一萬六千圓に加入し受取るべき保険金は保険金分割

拂の方法によつて毎月受取るやうにしますと、第十三頁の表の通り毎月合計百圓の収入があることとなります。即ち毎月賦金即ち受取金が九二円ある他に、分割拂には利息配當が第三年目から支拂はれますから、例へばこの表のやうに、第三年目には年額一四八円五〇銭、月割額にするると一四円三七銭づつ利息配當がつきます。これを前記の月賦金に加へた一〇四円三七銭が第三年目の毎月受取金です。斯様にしますと大體に於て二十年間毎月百圓程度の確定収入が得られます。同頁下の圖は二十年間の毎月受取金を示したものです。大體に於て百圓線を上下してゐることが判ります。

なほ、満期になつて保険金を分割拂にした場合には、以上の外に満期及満期後配當を現金で受取ることが出来ます。三十年満期について加入年齢別に配當金を掲げて置きましたが、この現金配當も適當に利殖しながら萬一の場合の準備金として置けば、尙更ら生活の安定を強化することが出来るわけです。

【註】 保険金分割拂については圖鑑第一〇二頁並に本解説書九五頁について知つて頂きたい。尙ほ第十三頁の利息配當率は資産利廻を五分とし、その九割即ち四分五厘より豫定利率の三分五厘を減じた一分で計算してあります。

斯様に一萬六千圓の保険にさへ加入して置けば、將來の生活に對する不安は全く解消されますが、その「心配とり除け料」は第十四頁に掲げてある通り僅かなものなのです。例へば二十五歳

利 保 險 は 有

投資の基本
条件
(圖鑑一五頁)

保険の利廻
(圖鑑一五頁)

投資物の税
引利廻
(圖鑑一六頁)

加入三十年満期では一日僅かに三五銭(正味掛金の一日平均)でよいのです。たゞこれだけを節約して掛金すれば將來の生活に少しも不安がないことになるのですから、全く安い「心配とり除け料」です。

保 險 は 有 利

生命保険は又投資としても非常に有利なものです。第十五頁に掲げてある六つの條件が投資の基本條件となるものですが、この基本条件の一つ一つについて各種投資物と生命保険とを比較検討してみますと、第十五頁上部右側の表のやうに生命保険の最も優れてゐることが判ります。

更に利廻といふ點から見ても同頁下表のやうに有利なものです。特に最近のやうに低金利時代となつてみますと、益々生命保険への投資は非常に有利になつて來ます。而も他の投資物では到底及ばないところの生命保険としての特殊の機能を持つてゐますから、生命保険への投資は最も理想的なものであるといふことが出来ます。

そこで先づ、第十六頁に於て生命保険の利廻を、各種投資物の税引利廻と比較してみることに致しませう。

税引利廻とはどんなものかといふことから説明します。第十六頁には株式、社債、地方債、國債、信託、銀行預金の税引利廻を示してありますが、株式の配當金に對しては所得税が掛けら

れ、社債其他の利子には資本利子税と所得税が掛けられます。この税金を配當金又は利子から差引いた正味利得金の利廻りが税引利廻りです。第十六頁の計算は昭和十三年四月一日日本勸業銀行調査による利廻り(税引にあらず)を基準として計算したものです。その計算方法は省略し、この計算に用いた支那事變特別税法による新税率を参考のため左に摘記して置きます。

	資本利子税	所得税
國債の利子 (利率年四分以下のもの)	百分の四	百分の二
地方債の利子 (利率年四分五厘以下のもの)	"	百分の六・五
社債の利子 ()	"	百分の八
信託及銀行預金の利子	"	百分の八

株式の配當金 所得階級によつて第三種所得税の税率が課せられます。株式配當金の税金は、所得配當金の中から利益配當税(配當率七分以上のものに對し、七分との差額に課する税金)を差引いた額の八割に對し、支那事變特別税法による税率を乗じたものが本税、又所得税法による舊税率で計算した税額の百分の四十五(昭和十二年度東京府、市の附加税率)が附加税です。従つて、この本税と附加税を所得配當金額から差引いたもの、利廻りが株式配當の税引利廻りとなります。第十六頁の計算は昭和十三年四月一日日本勸業銀行調査による株式平均配當率九分四厘八毛、株式利廻り五分四厘五毛の二つを基準として計算したものです。

貯金と保険との比較 (圖經一七頁) より (圖經一九頁) まで (圖經一七頁) 明瞭二筋道

そこで、第十六頁の表の見方について説明します。例へば、株式の税引利廻りは所得階級によつて違ひますが、現在二萬圓の所得のある人が二萬圓以上三萬圓以下の間の所得を全部株式配當金だとしますと、その税引利廻りは四分二厘三毛八絲になります。これに反し生命保険の利益配當金には一錢も税金が掛りません。そこで株式の税引利廻りを、安田生命三十歳加入二十五年満期の利廻りと比較してみますと、二萬圓以上の所得者なら保険の一時拂よりも、又三萬圓以上の所得者なら保険の毎年拂よりも利廻りが低くなつてゐます。ですから二、三萬圓以上の所得者は株式に投資するよりも生命保険に投資した方が有利です。

株式以外の税引利廻りは所得階級別に關係なく常に同じものですが、矢張り生命保険に較べると遙かに劣つてゐることが判ります。

次には貯金と保険とを比較してみませう。第十七頁に東京帝大教授法學博士森莊三郎氏の御話を掲げて置きましたが、上の圖のやうに貯金の道は汗を流して一步一步苦艱の坂道を昇つて行くやうなもので、少しでも心に緩みが出たり、途中でつまづいたりすればそれで終りです。仲々希望の峰に登り難いのが貯金です。

これに反し保険の道は第一回の保険料を拂込んだだけで希望の財産が出来ますから、後は平々坦々たる道を平和と安らかな心を以て、元氣よく希望の殿堂へ向つて進むことが出来ます。然しながら、假りに非常に意志の固い人があつて、貯金を最後まで續けて行つたとしても、貯金は到

生命保険と
定期積金
(圖鑑一八、
一九頁)

底生命保険の敵でないことは、第十八頁及び十九頁の圖表が明かに之れを教へて呉れます。

第十八頁は生命保険の掛金(二十五歳加入三十年満期保険金一萬圓)を以て銀行の定期預金とした場合と生命保険に加入した場合との比較です。定期預金の利率は年三分三厘ですが税金を差し引きますと二分九厘の利廻にしかありません。そこで保険の掛金を毎年始定期預金にして行きますと表のやうな金額となり、満期の時即ち三十年末には元利合計は九、六七七〇二圓で、目的の一萬圓に到達しないばかりでなく、途中で死亡又は挫折すればその年度までの金しか貯蓄出来ないわけです。

これに反し生命保険なら何時死亡しても一萬圓を受取ることが出来ます。又第二十六年目以降は現金配當がありますから、これを定期預金と同じ利率で利殖して行きますと、第三十年末には二八〇円九六圓になりますから、受取金は一〇、二八〇円九六圓です。續いて満期になると、満期の受取金即ち三十年末の受取金額に、満期及満期後の配當を満期時の現價(現價については本解説書第五二頁参照)に換算した二、三二二円三三圓を加へると、その受取金は二二、五九三円二九圓になります。定期預金に較べて二、九一六円二七圓生命保険の方が有利です。又途中死亡の場合に於ける受取金を各年度について比較してみても、常に生命保険の優れてゐることが判ります。この受取金を圖で示しますと第十九頁のやうになります。赤線が生命保険の受取金、青線が定期預金の受取金、緑線が掛金の累計額です。

保険料に對
する所得税
免除
(圖鑑二〇頁)

次には保険料に對する所得税の免除と、相続税を生命保険で準備することによつて生ずる利益に就いて研究してみませう。

第二十頁は保険料に對する所得税免除の利益についての計算です。所得税法第十六條の三には保険料二〇〇円までは所得金額から控除する規定が設けてあります。即ち保険料二〇〇円までは所得税を免除されます。そこで、表中所得金額一萬圓の場合を例にとつて説明しますと、表中一萬圓のところを順次下の方に見て行けば所得本税が九二二円〇一圓、附加税が二四三円二七圓、合計一、一五五円二八圓が納税額になることが判ります。然るに、この一萬圓の所得者が保険料二百圓を控除されたとしますと、所得税は九千八百圓に對して課せられることとなります。九千八百圓の所得税は本税附加税を合して一、二二二円一三圓ですから、保険料二百圓を控除したために三、四円一五圓だけ税金が少なくなりります。従つて、毎年同額づゝ利益するものとしますと、これを年四分の複利で利殖すれば二十年間には一、〇五七六六〇圓、三十年間には一、九九一九一圓の利益となるわけです。

相続税の準
備
(圖鑑二一、
二二頁)

次に資産家にとつては相続税は非常な負擔です。百圓以上の相続税に對しては分納の特典はありませんが、出来ることなら分納などは避けたいものです。平常から相続税の準備をして置けば納税に困るやうなことはない筈です。そこで相続税の準備には非常に有利な生命保険の利用を極力お勧めします。相続税を生命保険で準備して置きますと、相続税を納めても資産を少しも減らさ

ないばかりでなく、実際に納める税額よりも遙かに少額の掛金で足りますから實に一舉兩得の名案です。

第二十一頁は直系卑屬の家督相続の場合です。例へば相続価格二十萬圓のところを順次下の方へ見て行きますと、第一欄の「超過累進税率」の説明は表の欄外の通りですから省略、その下の一〇、二二五円が二十萬圓に對する相続税です。この相続税を準備するためには一萬一千圓の生命保険に加入して置けばよいのです。何故一〇、二二五円の相続税に對し一萬一千圓の保険が必要かと言ひますと、相続税として準備した保険金のうち、五千圓を超過した部分に對しては課税されることになりましたから、税額だけ準備したのでは不足します。従つて、この保険金に對する税金も同時に準備しなければならぬからです。ところが、この保険金の算出方法は面倒ですから省略し、逆に一一、〇〇〇円の保険金で一〇、二二五円の相続税を完全に納めることが出来るかどうかを検算して見ませう。

11,000円 - 5,000円 = 6,000円……保険金中相続税を課せられる金額

従つて、この場合實際に相続税を課せられる相続価格は

200,000円 + 6,000円 = 206,000円 です

然るに 200,000円の相続税 = 10,125円

6,000円 × $\frac{100}{1000}$ = 600円

従つて 206,000円 × $\frac{10,125}{1000} + 600円 = 10,725円$

即ち 10,725円が實際の相続税ですから、11,000円あれば相続税を納めてなほ275円残ります。

然らば、一萬一千圓の保険金に對しては幾ら掛金が必要かと言ひますと、表中保険金額の下の欄にあるやうに、例へば三十歳の人が三十年満期に加入すれば最初の保険料は三九五円一二錢(表の黒字)です。たゞこれだけの保険料を拂込むだけの決断によつて二十萬圓に對する相続税が準備されるのです。然かも満期までの正味掛金(表の赤字)は僅かに二、六六七円一八錢で済みますから、結局一〇、二二五円の相続税も僅かに二、六六七円一八錢でよいことになりました。第二十二頁は直系卑屬の遺産相続の場合で、表の見方は家督相続の場合と同様です。

次には、纏つた金を生命保険によつて有利に活用する例として「一時拂保険と定期預金」及び「資金の活用」の二つを紹介しませう。

第二十三頁では、纏つた金を定期預金にするよりも、その金で一時拂保険に加入した方が遙かに有利だといふことを申し上げたいのです。同頁下の表のやうに、今六、〇九五円六〇錢(二十五歳加入二十五歳満期保険金一萬圓の一時拂保険料)を一時拂保険(圖鑑第九六頁本解説書第九一頁参照)に投資して置くと、何時どんなことがあつても一萬五千圓内外の金となつて歸つて來るし、満期には約一萬八千圓になるのです。これに反し、この六、〇九五円六〇錢を定期預金にすると満期まで行つても僅かに一萬二千圓位にしかありません。表中各年の受取金額は同頁上部の圖のやうになります。如何に一時拂保険が有利であり、又投資として如何に妙味あるものであるかといふことが判

一時拂保険
と定期預金
(圖鑑二三頁)

資金の活用
(圖鑑二四、
二五頁)

ります。

第二十四頁は、一萬圓の資金を生命保険に投資した場合ですが、一萬圓の資金があればこれを年々三分五厘の利率で利殖しながら掛金して行く方法をとると二萬五千圓の保険(二十五歳加入三十年満期)に加入することが出来ます。二十五歳加入三十年満期の保険金二萬五千圓の年拂保険料は八七五円五〇銭ですが、第六年目から五分累加配當を差引しますから、正味掛金は表中「正味掛金」欄のやうになります。

表を順次右へ見て行くと、第一年目には資金一萬圓のうちから八七五円五〇銭を掛金し、残金を三分五厘で利殖すると九、四四三円八六銭になります。第二年始にはこの残金のうちからまた八七五円五〇銭を掛金し、残った金を三分五厘で利殖すると、第二年末には八、八六八円二五銭になります。同様な方法を繰返し第二十六年度以降の現金配當は前年末残金に加へて利殖して行きますと、第三十年末即ち満期には一、二二九円九八銭残ります。

若し第一年末に死亡したと假定しますと、保険金二五、〇〇〇円と資金の残金九、四四三円八六銭との合計三四、四四三円八六銭が加入者の手に残る金です。第二年度以降も同様な方法で計算した金が残りますが、満期にはこの外に満期及満期後配當金がありますから、受取金は三二、二四一円四七銭となります。即ち最初の資金は満期に三倍以上になつて歸つて來ます。

斯様に最初の資金は常に二倍半乃至三倍以上になつて歸つて來ますが、更に最も重寶なことは

何時でも殆んど資金と同額乃至二倍以上の金を融通することが出来るといふことです。即ち最初の年には資金一萬圓から第一回の掛金を差引いた九、一二四円五〇銭、第二年目には第一年末残金から第二年度の掛金を差引いた八、五六八円三六銭は何時でも融通出来る金です。表中「毎年始資金残金」といふのが夫れです。第四年目以後になると解約返戻金を會社から借りて使ふことが出来ます。実際にはこの七、八掛しか借りることは出来ませんが、大體を知るためには差支ありませんから、この表では解約返戻金は全部借りられるものとして解約返戻金をそのまゝ掲げて置きました。この金も融通出来る金ですから、これを前記の「毎年始資金残金」に加へたもの即ち表中「融通金額」欄の金が何時でも融通出来ます。

以上の關係を圖にしてみますと第二十五頁のやうになりますが、要するに、今一萬圓の資金を生命保険に投資すれば、何時でも二倍半乃至三倍以上の金になつて歸つて來る(一萬圓を銀行預金にしたのでは三十年間に一萬八千圓にしかならぬ)し、金が必要な時には何時でも資金と同額乃至二倍以上の金を融通することが出来るわけです。生命保険も利用の如何によつては斯くも有利に、しかも堅實な投資が出来るものだといふことを知つて戴きたいのです。

次には退職資金を減らさない方法を御紹介します。一時に纏つた退職資金を貰つて有頂天になつてゐると元も子も無くしてしまひます。退職資金を貰ふ前から研究し、貰つたら直ちに第二十六頁の方法を實行して戴きたいのです。

退職資金を
減らさない
方法
(圖鑑二六頁)

先づ退職資金一萬圓は第二十六頁の圖のやうに振り向けてしまひます。即ち

- 一、建築費に 一、五〇〇円〇〇
- 二、生活補助資金に 二、二七三円〇六
- 三、生命保険割引一時拂保険料に 六、二二六円九四

建築費と生活補助資金については同頁記載の説明に譲り、生命保険に關する分だけ解説しませう。退職資金を五十五歳の時受取つたものとして、十五年満期保険金六千五百圓の一時拂保険（一時拂保険については圖鑑第九四頁より一〇一頁まで、本解説書第八八頁より九五頁まで参照）に加入、割引一時拂保険料として六、二二六円九四を支出します。さうすると第六年目から現金配當がありますから、これを年三分五厘の利率で利殖しますと、第十五年目まではこの利益配當金の元利合計と保険金と保険料拂戻金（第十五年目の保険料拂戻金は〇です）とが何時でも加入者の受取金となります。又満期には利益配當金の元利合計、保険金、満期及満期後配當の満期時に於ける現價（現價については本解説書第五二頁参照）の合計額が受取金となります。表中「途中死亡又は満期受取金」欄の金額が夫れです。

退職資金は、斯様に生命保険によつて完全に保護されてゐることが判ります。その外に家と生活補助資金とが残つてゐるわけですから、この方法は單に退職資金そのものゝ保護といふより寧ろ退職資金を殖やす方法と言つた方がよいかも知れません。圖中赤線は一時拂保険料です。即ち

収入向上期
に一生の基
礎を固める
(圖鑑二七頁)

簡易保険と
生命保険と
(圖鑑二八、
二九頁)

圖を三つに分けたものゝうち割引一時拂保険料の部分に當ります。青線は下部の表の金額を圖にしたものです。

人間の収入といふものはいつが一番多いかといふことは、その人の事業の性質により又能力により一概には言へませんが、一般に考へて學者は第二十七頁の圖のやうに説いて居ます。つまり働き旺りの時期を最高頂とし其後は段々収入が減退するといふのが普通であります。収入が上り坂にある時、一生の基礎を定めて了ふ生命保険は、この意味で最も賢明な財産獲得の方法です。

次には簡易保険と生命保険との優劣を比較してみませう。簡易保険と言つても矢張り生命保険なのですから、こゝでいふ生命保険とは會社の生命保険、といふ意味で、第二十八頁は安田生命との比較です。簡易保険は現在最高保険金額は四百五十圓ですが、十月から七百圓になります。簡易保険は事實上、右の保険金額以上は加入出来ないし、安田生命では一千圓以下の加入は出来ないことになつてゐます。従つて兩者を比較する便宜上兩者とも保険金を一千圓としました。

簡易保険四十歳加入二十年満期保険金一千圓に對する保険料は一ヶ年六〇円ですが、簡易保険には利益配當がありませんから二十年間毎年六〇円づゝ掛けなければなりません。然し第六年度以後に於て死亡した場合、或は満期となつた場合には保険料割戻金があります。従つて、若し途中で死亡した場合の正味掛金は、年拂保険料の累計額からその時に受取る保険料割戻金を差引いたものになります。例へば表中第十年目のところを見ますと、年拂保険料の累計は六〇円の十年

分即ち六〇〇円です。この累計から十年目の保険料割戻金七〇円を差引いた五三〇円が十年目に死亡した場合の正味掛金となるわけです。さうしてその時受取る保険金は一千圓ですから、差引四七〇円が正味利得金といふことになります。同様な方法を以て満期時の正味利得金を計算すると僅かに八〇円にしかありません。これに反し安田生命の正味利得金は常に簡易保険より多く、特に満期時を比較し見ますと、簡易保険の八〇円に對し四七三円一五錢ですから到底比較になりません。兩者の利得金の比較は第二十九頁に圖を以て示してあります。

以上は簡易保険を値段の點から比較したものです。更に兩者を制度の上から比較して見ましても遙かに安田生命の方が優つてゐます。第二十九頁の比較表を見て戴けばこのことはハッキリ判ります。

保 險 は 信 用

今日事業を經營する上に最大の武器は信用でありませう。生命保険は信用を増大する有力な材料です。計畫的な頭腦、將來を慮る慎重さ、長期に亘り繼續する建設的努力、温い愛情、これらは皆生命保険加入者の有する共通的特徴であります。かういふ人々に信用の集るのは當然のことではありますが、今日積極的活動をしてゐる事業人の中で保険に入つてゐない人を探し出すのは仲々困難だといふ事實が、何よりも雄辯に保険と信用との關係を物語つてゐます。

保 險 は 信 用
(圖鑑三〇頁)

第二部

それではどんな保険を撰べばよいか？

第一章 良い會社の條件は？

何故生命保険をお勧めするか、何故生命保険に加入しなければならぬかといふことは第一部の方で色々な角度から説明したわけですが、然らば一體どんな保険を撰べばよいものであらうかといふことをこの第二部の方で研究してみたいと思ふのです。

生命保険は我々の生活上缺くことの出来ない必需品であることが判り、さてそこで愈々保険に加入するとしても保険を撰ぶには餘程注意を拂はなければなりません。一口に保険といつてもいろいろで、掛金が馬鹿に高かつたり、保険の品質とも云ふべき約款が加入者にとつて著しく不利だつたり、又會社の基礎がしつかりしてゐなかつたりしては折角の御志も充分遂げられなくなります。従つて保険に加入する場合には「良い會社の良い保険を撰ぶと云ふことが最も大切」なこととなります。良い保険と云ふのは掛金の安いこと、約款が加入者に有利なことの二つの條件を備へてゐなければなりません。安田生命は會社としても申分のない堅實過ぎる程堅實な會社で

保 險 選 擇 の 標 準
(圖鑑三一頁)

あるし、保険にしても全く申分のないものでありまして、前に述べた二つの条件を完全に持つて居ります。然し、たゞ口先で安田生命は良い会社だ、良い保険を賣つてゐると言つてみたところで、それはたゞ自家宣傳に過ぎないと思はれても致仕方がないわけです。だから、この圖鑑の第二部に於ては立派な證據を擧げて安田生命の實際を説明してみたいと思ひます。従つて、これは外務員諸氏の研究資料にもなるし、又加入者はこれによつて安田生命の全貌を知ることが出来るわけです。先づ第二部の第一章に於て良い会社の条件から考へて行きませう。

良い会社の条件

- (1) 固い基礎
- (2) 厚い信用
- (3) 堅實な資産
- (4) 確實な進歩
- (5) 優秀な契約内容

固い基礎

(1) 固い基礎

相互会社と株式会社の比較 (圖鑑三三頁)

先づ何と云つても会社の基礎の固いといふことが一番大切なことです。現在我が國に於ける生命保險會社を組織の點から見ますと株式會社と相互會社の二つに別れてゐまして、その會社數も

相互組織の理想と現實 (圖鑑三三頁)

三十三社を數えてゐますが、その内第一、千代田、昭和、富國徴兵の四社だけが相互組織で、その他は全部株式會社となつてゐます。では、株式と相互との間にはどんな差があるか、これを學問的に申しますと仲々面倒ですが大體の觀念からこれを説明しますと、株式會社は株主があつて資本金を出して出來た會社であり、相互會社は基金據出者が集つて資本金を出して出來た會社です。すから、どちらにしても創立の時には株主に當るものがあつた譯です。然し相互の方は或る期間かゝつてこの基金を據出者に返してしまつた後は眞に株主のない會社となり、加入者自身が株主と同様なものになるのです。従つて會社が儲ければ法定積立金を積立て、役員賞與とか、社員退職資金とかいふものを差引いた残りの利益金(相互會社では剩餘金と云つてゐる)は全部加入者で分配しますが、若し損をした場合にはその損失額は加入者で負擔しなければならぬこととなります。ところが株式會社になりますと、何年経つても株主と云ふものは無くならないから、その出資額に對して、利益のあつた場合には配當をしなければなりません。ですから相互會社のところで述べたやうな積立金其他を差引いた残りの利益金全部を加入者で分配するといふわけには行かないこととなります。然し若し會社が損をしたやうな場合には株主が全部責任を負ひますから加入者には少しも負擔がかゝらないのです。

だから、相互組織は生命保險のやうな加入者の利益を尊重しなければならぬ事業に在つては理想的な良い制度には相違ありませんが、然し相互會社だから絶対によいとばかりも言へないの

です。第三十三頁の『相互組織の理想と現実』といふのを見れば判る通り、昭和生命の如きは組織は相互会社ですが、業績は極めて不振で年々契約高にしろ、資産にしろ減り行くばかりで、同じ相互会社の第一や千代田が年拂保険料の四分累加配當（累加配當に就ては本解説書第五四、五五頁参照）を實行してゐるにも拘らず、昭和は僅か九厘といふ微々たる配當しか出来ない實情です。茲に於て保險会社の經營は決して組織などではなく、全くこれを經營してゐる人の如何に依るものであることがハッキリ判ります。だから、我々は決して相互組織といふ美名に眩惑されてはなりません。株式會社だらうが相互會社だらうが結局會社自體を見極めることが大切です。前にも述べたやうに生命保險會社は三十三もありませんが、その内容なり業績なりを見ますとピンからキリまであつてどの會社でも同じだとは言へないので、株式會社でも相互組織に優るとも劣らない加入者配當をしてゐる會社もあるのです。安田生命の如きは利益金を加入者に分配する點に於て常に業界第一の高率を示してゐます。

相互會社に
優る株式會
社
(圖鑑三二頁)

第三十二頁は株式會社の代表安田生命と相互會社の代表第一生命を對照したのですが、安田生命の方が加入者本位の度合が高いといふ結論に到達します。

即ち利益金の處分に於て相互會社の第一には株主配當こそないが役員賞與があるし、また社内への保留額も多くなつてゐます。又安田の方には、極めて僅少な株主配當はありますが、社内保留を最少限度に止めてゐるし、役員賞與の如きものもありませんから、加入者への分配率は安田

傳統の力
(圖鑑三四頁)

の方が遙かに高くなつてゐるのです。それは結局、安田生命が明治十三年一月共濟五百名社の名稱を以て本邦生命保險の開祖として生れ、明治二十七年三月組織を合資會社に改めて共濟生命と改稱するまで、常に共濟五百名社の趣意書により私利私慾を離れて經營され、續いて共濟生命と改稱と同時に定款を以て**出資者の配當率を年六分以下に制限し**、利益金の大部分を加入者に分配するといふ礎を確立して加入者の利益を充分尊重したために外ならないわけで、常に業界最高の加入者分配を堅持してゐる原動力もここに在るので、然かも、堅實一點張りの經營を社として終始一貫渝らぬ強い傳統の力が、今日の安田生命の鞏固な基礎を作り上げて來てゐるのです。

安田生命は明治三十二年三月株式組織に、又昭和四年八月社名を安田と夫々改められました。その業績は年と共に堅實な發展を遂げて來ました。第三十四頁には組織又は名稱の變遷と、契約高及び資産の順調なる増加を示して置きました。尙この頁の右端には創業以來組織社名の變更のあつた當時に於ける日本國內の状態はどうであつたかと云ふことを記載して置きましたから参考にして戴きたい。

厚い信用

(2) 厚い信用

安田財閥の
現勢
(圖鑑三五頁)

次には會社の信用の厚いと云ふことが大切です。何となれば保險契約は二十年、三十年、場合によつては七十年といふ長期間にも及ぶものですから社會の信用がなくては駄目です。この點か

堅實な資産

資産と投資

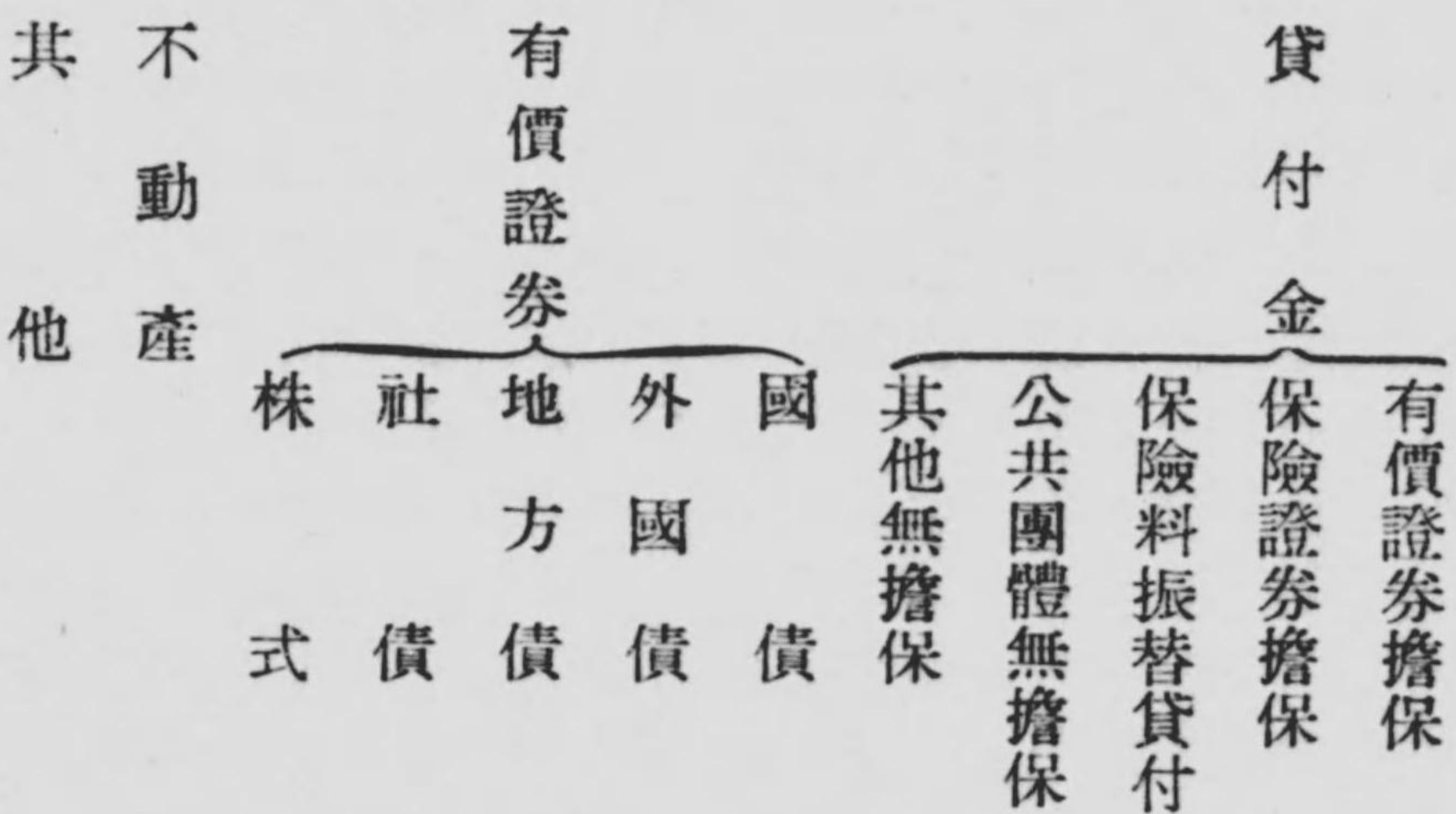
から見ますと、安田生命の如きは天下の安田財閥、特に堅實を以て名聲高き安田財閥の經營なので、信用と云ふ點に於ては多くを言ふ必要がありません。第三十五頁には安田財閥の現勢と題して安田財閥の總元締安田保善社が社會に占める勢力を一表に纏めて置きました。

(3) 堅實な資産

次には資産が堅實で充實したものでなければなりません。特に生命保險會社はその資産の大部分が加入者に屬するもの(圖鑑第三七頁参照)ですから、その内容の如何は非常に重要なものとなつて來ます。安田生命の資産内容は充分な含み(含みといふのは所有資産を時價よりも低く評價したために生れて來る餘裕金額)を有するため、相當な時價の變動に會つてもビクともしないだけの餘裕を持つてゐますから少しも心配は要りません。そこで、會社の資産は決して死蔵してゐるものでなく常に色々なものに投資してゐるのですが、これを大別すると

- 郵便振替貯金
- 預貯金 銀行預金
- 金錢信託
- 不動産抵當
- 財團抵當

資産運用方法の優秀性 (圖鑑三六頁)



といふことになります。

元來如何なる事業にしてもさうでせうが、特に生命保險のやうに多數の加入者に密接な利害關係を有する事業に在つては資産の運用、即ち投資方法が非常に大切なことゝなつて來るのです。従つて「危険の分散」といふことが生命保險資産投資の一大鐵則となつてゐます。

第三十六頁には第一、千代田兩社の投資状態を安田と比較してみました。第一生命は有價證券千代田生命は貸付金の非常に多い会社ですから投資偏重の代表的見本として兩社を採つたわけですが、これに比べて安田生命の投資がよく均衡のこれたものであることが判ります。

なほ昭和七年から六ヶ年に亘つて、安田生命の資産利廻を國債、社債、株式の利廻と比較してみると同頁の右下の表のやうになります。これを圖で示しますと、その左に掲げてあるやうな變化を辿つてゐます。これを以てみても安田生命の資産利廻は最近の低金利の影響を受けたとはいへ、國債、社債に比べて優つてゐるばかりでなく、株式の如き浮動性は少しもなく實に堅實なものであることが判ります。

然らば、會社の總資産の内加入者に屬する資産はどうかといふことを八大生命について比較したのが第三十七頁です。加入者に屬する資産といふのは責任準備金、利益配當準備金、支拂備金の三つですが、これを合計したものが眞中の表の「加入者に屬する資産・金額」欄にある金額です。この金額の總資産に對する割合が表中赤字で示したもので、これを圖にしてみると安田生命が九七%三七で、總資産中加入者の資産が一番多いことが一目して判ります。

次に、會社ではこの資産を運用して利息を生みます。これが利益金の主要部分を占めることになりませんが、生命保險會社の利益には、たゞこの利息だけではなく、色々な利益が他にあります。利益金を分解してみますと次の四つに分れます。

資産利廻と市中利廻との比較
(圖鑑三六頁)

加入者の資産
(圖鑑三七頁)

利益金の源泉
(圖鑑三八頁)

利	差	益
死	差	益
費	差	益
解	約	益

これを簡単に説明してみますと、利益益といふのは、前述のやうに資産を運用して得た利息のうちから、保険料積立金(註参照)の豫定利息を差引いた残りが利益益となります。利益益の概算額は次の式によつて計算すればよい。

$$\text{實收利息} = (\text{年末保険料積立金} \times \text{豫定利率})$$

【註】 保険料積立金といふのは保険金を支拂ふために保険料から事業費を差引いた純保険料を年々積立てて行つたものゝことです。この積立金は豫定利率で利殖して行くことになつてゐますから、前式で年末保険料積立金に豫定利率を掛けたものが保険料積立金の利息となります。本解説書第四八頁乃至五三頁の「保険料の仕組」を参照して下さい。

次に死差益について説明します。會社でその年度内にはこれだけの人が死亡し、これだけの保険金を支拂つても差支へないといふ豫定人員及び豫定保険金を一定の標準の下に計算します。これが豫定死亡人員及び豫定死亡金額で、實際の死亡はこの豫定を超過したり、又少かつたりするものです。實際死亡が豫定死亡よりも超過した場合にはその差が死差損となり、豫定より少ない場合には死差益となります。

死差益

利差益

然し、これはたゞ概念だけでありまして、ほんとうの死差益又は死差損とは言へないのです。ほんとうの死差益又は死差損といふのは、右に述べた概念的な死差益又は死差損からその死差益又は死差損に対する保険料積立金を差引いたものです。その理由を死差益の場合について述べてみますと、前のやうにして算出した死差益、言葉を換へて言へば當然死亡を豫定してゐたものが死亡しなかつたために儲けとなつた金ですが、それは結局保険金なものですから、それだけの保険契約は依然として保険料を掛け続けられてゐるわけです。

斯様に保険契約が繼續されてゐる以上、當然保険料の大部分（収入保険料から事業費を差引いたもの）はいざと云ふ場合に保険金の支拂に充てるため積立てられなければなりません。これを保険料積立金と云ひます。従つてこの保険料積立金を利益金とするわけには行きませんから、前に算出した死差益からこの積立金を差引いたものが本當の死差益となるのです。死差損の場合でもこれと同じ方法で計算すればよいのです。死差益（又は損）の概算額は次の式によつて計算すればよい。

$$\begin{aligned} & \text{豫定死亡—實際死亡} \dots\dots\dots (A) \\ & (A) \times \frac{\text{年末保険料積立金}}{\text{年始契約高—年末契約高—實際死亡契約高}} \dots\dots\dots (B) \\ & (A) - (B) = \text{死差益} \end{aligned}$$

費差益

費差益はまた附加益とも言ひますが、これは豫定の事業費から實際に費つた事業費を差引いたものです。事業費は加入者から徴収する保険料の中に含まれてゐるものですから、収入保険料に、営業保険料と附加保険料との比率を乗じたものが豫定の事業費となります。この豫定の事業費から實際に使つた事業費と税金とを差引いたものが費差益の概算額となります。その比率を假に附加率（註）と呼べば費差益の計算は次の通りです。（註 附加率の嚴正な意義は純保険料に對する附加保険料の比率を云ふ）

$$\text{収入保険料} \times \text{附加率} - (\text{事業費} + \text{税金})$$

解約益は保険契約の失效又は解約によつて生れる利益です。生命保険の保険料は純保険料と附加保険料とから出来てゐるもの（圖鑑第四九頁保険料の仕組参照）で、そのうち附加保険料は事業費に充てますが、残つた純保険料は三分五厘の豫定利率で利殖しながら保険金支拂のために積立てゝ行きます。そこで、若し途中で失效になつたり、解約となつた場合には右に述べた積立金の中から、保険金千圓につき五十圓以内の金額を控除したものを解約返戻金として加入者に拂戻すことになつてゐます。（約款第二十一條参照）

従つて、この積立金と解約返戻金との差額が會社の利益となるわけです。これを解約益と言つてゐますが、概算額を計算するには次の式を用ふればよい。

$$\text{責任準備金中ノ免責積立金—解約返戻金}$$

註 【責任準備金中ノ免責積立金の説明】 失效解約になつた契約でも、失效解約前には保険料積立金を積立

解約益

利益金處分
方法
(圖鑑三八頁)

てあります。しかしこの積立金もその契約が失効解約になると將來の積立は不必要となり、これまで積立てある保険料積立金は加入者に支拂ふ解約返戻金に當てるのです。この保険料積立金を免責積立金と言ひ、毎年會社で發表する責任準備金明細表中「年始保険料積立金中其ノ他ノ事由ニ因リテ積立ノ義務ヲ免レタル部分」に屬する金額が夫れです。

利益金の源泉については大體右に述べた通りですが、斯うして生れた利益金は一體どういふ風に處分されてゐるかと言ひますと、第三十八頁に掲げた表が安田生命最近十二年間に於ける利益金處分の變遷で、表中年度の次に總利益金を掲げ、次にこれが加入者と株主にどれだけ分配され、通常準備金にどれだけ繰入れられたかといふことを示し、更にこれ等の處分は總利益金に對しどんな割合となつてゐるかといふことを示したものです。例へば、表中昭和十二年度決算の分についてみますと、總利益金二、〇八六、八六六圓のうち一、八七九、九二三圓を加入者に、また四、五〇〇圓を株主に夫々配當し、殘額二〇二、四四三圓を通常準備金に繰入れて會社内に保留したわけです。

これが利益金に對する割合は、次の割合欄にある通り加入者配當九〇%〇八、株主配當〇%二二、通常準備金九%七〇といふことになるのです。これを以てみても安田生命の利益金處分が如何に加入者本位であるかといふことが判ります。

株式八社利
益金處分の
實際
(圖鑑三九頁)

その因つて來る所以は、第三十八頁の表の上部に示してある通りですが、株式八社の昭和十二年度に於ける利益金處分状態を、利益金を一〇〇としてどんな割合になつてゐるかを比較したの

株主配當と
役員賞與
(圖鑑四〇頁)

が第三十九頁の圖です。安田の加入者本位であることは別に説明するまでもなくこの圖がこれを明示して呉れてゐます。たゞこゝに何故、第一千代田といふ二大會社を入れてないかといふことです。この二社は相互會社で組織の關係上利益金處分の性質が幾分違つてゐるからこれを省いたわけです。

なほ利益金の處分に關して、株主配當と役員賞與のやうな加入者に關係のないもの、即ち株主と役員とで搾取した金額がどれ位になつてゐるかといふことを日本、明治、帝國の三株式會社最近二十一年間(自大正六年至昭和十二年)に就いて調べてみますと、第四十頁のやうに莫大な金額に上つてゐます。例へば、日本生命の如きは株主配當役員賞與を合して二三、八八三、〇〇〇圓といふ驚くべき金額になつてゐます。然るに、安田生命では役員賞與を取らないばかりでなく、株主配當についても二十一年間の累計が僅か九四、〇〇〇圓に過ぎないといふ状態で、他三社に比し同一圖表で表すことの出來ぬ程少額なものです。これを以てみても安田生命が加入者への奉仕に献身的努力を續けて來たことが明らかです。

相互會社と
役員賞與
(圖鑑四一頁)

次に、大體右と同じ性質のものを最近二十一年間について相互會社と比較したのが第四十一頁の圖と表です。相互會社には株主配當に當る基金配當及利息があります。第一生命は下の表のやうに、大正六年から大正十一年までの間に於て三一三、〇〇〇圓の基金配當及利息がありました。が、それ以後は基金を償却してしまつたので、自然基金配當も利息もなくなつて來ました。千代

田生命は既に大正五年に基金償却済であるためこの表には基金配當及利息は現れて居ません。役員賞與は兩社共あります。この役員賞與と基金配當及利息の二十一年間の合計は、表にある通り非常に大きな金額に上つてゐるのです。これを比較しますと四十一頁の圖のやうになりますが、これを以てみても安田生命が如何に加入者の利益を侵害してゐないかといふことが判るでせう。以上で大體安田生命の資産の良いこと、利益金處分が加入者本位であることがお判りのことと思ひます。

斯様に會社の資産内容が充實して居り、利益金處分が如何に加入者本位であるとしても、加入者にとつては保険金や利益配當金を開違ひなく受取ることが出来るかどうかといふことが一番大切なことです。次には保険金或は利益配當金の支拂能力がどうなつてゐるかといふことを調べてみなければなりません。第四十二頁が前者、第四十三頁が後者に對する支拂能力を昭和十二年度に於ける主要會社に就いて比較してみたものです。

保険金支拂の元になるものは責任準備金であり、責任準備金が資産の大部分を占めてゐるので、すから、保険金の支拂能力を知るためには保険契約高一千圓に對しだけの資産があり、それだけの責任準備金があるかといふことを調べてみて最も多いものがよいといふことになります。

先づ第四十二頁の『保険金の支拂能力』を資産から見ますと、契約高一千圓に對する資産は安田生命が二二二四四圓で最高です。この計算は圖の右に示してある總資産を契約高で割つたも

保険金の支拂能力
(圖鑑四二頁)

利益配當金の支拂能力
(圖鑑四三頁)

のです。

また責任準備から見ても安田生命は契約高一千圓に對し一八九六〇圓の責任準備金があり、これ亦最高を示してゐます。計算方法は表の右にある責任準備金を契約高で割ればよいわけですが、斯うしてみると安田生命の保険金支拂能力は主要會社中最高であることが判るのです。

利益配當金支拂の元となるものは、言ふまでもなく利益配當準備金ですから、利益配當金の支拂能力は保険契約高一千圓に對しだけの準備金があるか、又契約高一千圓當りだけの配當金を支拂つてゐるかといふことを比較して見て、最も多い會社が一番よいといふことになります。第四十三頁の利益配當金支拂能力を配當準備金から見れば上圖のやうに安田生命は契約高一千圓に對し二四八五圓となり、實際支拂高から見ても七四五八圓で共に最高を示してゐます。計算方法は前者は配當準備金を年末契約高で割り、後者は支拂配當金を年始契約高で割つたものです。何故保険金の支拂能力の方には相互會社があるのに、利益配當金の支拂能力の方には相互會社を省いたかといふことですが、その理由は保険金は株式會社でも相互會社でも同じ性質のものですが、利益配當金の方は兩者や、性質を異にしますので株式會社のみを比較したわけです。

(4) 確 實 な 進 歩

次には、會社が堅實な進歩をしてゐるかどうかといふことです。如何に會社が大きくても所謂

確 實 な 進 歩

會社經營の
確 實 な 進 歩
(圖鑑四四、四五頁)

水膨れでは何にもなりません。砂上の樓閣は何時か毀れる時が來ます。どうしても堅實な歩みを辿つてゐる會社でなくては、眞に加入して心配のない會社とは言へないのです。そこで第四十四頁から第四十五頁に亘り安田生命が昭和八年から十二年まで五年間に經て來た歩みを示して置きました。

右の方に金額又は率等を掲げ、これを左の方に圖で現はして置きましたが、年末契約高、新契約高、純増加、平均保険金共に年々上昇の一途を辿つてゐます。失效解約率が最近急激な低下を示してゐることは何よりも喜ばしい現象です。然かもその低率なることは業界稀に見るもので、後に述べるやうに安田生命の契約内容の優れたものであることを物語つてゐます。死亡又は満期の保険金は年の進むにつれて増加するのが當り前ですが、圖で判るやうに緩やかな理想的カーブを畫いてゐることは、保険契約選擇に無理のないことを如實に證明してゐます。資産、責任準備金、利益配當準備金、収入利息共に年々堅實なる増加を示してゐるのは安田生命の強味と言はねばなりません。茲で用語の説明を簡單に試みてみませう。

四四、四五
頁の用語説明

- 一、**年末契約高** 年度の終りに於て會社の有してゐる契約高
- 二、**新契約** その年度内新しく募集したものの内、保険料が支拂はれ契約が成立したものの**増加** 年末現在の契約高から年始現在の契約高を差引いた契約高、即ちその年内に**新契約**其他の増加した分から死亡、満期、失效解約其他の減少した契約高を差引きし

た純然たる増加契約高

- 四、**平均保険金** 契約一件當りの保険金額で、普通年末契約高又は新契約に就いて計算されま

すが、こゝでは年末契約高に對する分だけを掲げて置きました。その計算は年末契約高を件數で割ればよいのです。

- 五、**失效解約率** 失效解約高を年始現在契約高で割つたもの、即ち年始現在契約に對し幾らの割合が失效解約になつたかといふことを見るものです。経過契約（年始年末契約高の和から死亡契約を差引いて二で割つたもの）に對するもの、又は新契約に對するもの等がありますが、こゝでは年始契約に對する失效解約率を採りました。又失效解約高の數字のとり方にも色々ありますが、こゝでは事業報告書中契約種類別統計表の解約に因る消滅、保険料の不拂に因る消滅、其他の事由に因る消滅の合計から、其他の事由に因る増加を差引いたものを失效解約としてあります。

- 六、**死亡・満期保険金** 満期保険金、保険の最終目的は保険金に在るわけですが、會社の支拂ふ保険金は死亡によるものと満期によるものとの二つに區別出來ます。前者を死亡保険金、後者を満期保険金と稱へてゐます。

- 七、**資産** 収入した保険料の大部分や利息などが年々會社に蓄積されて行き、これが會社の資産といふことになります。然しこれと反對に責任準備金、株金、諸積立金等は

会社の負債となるものです。而も安田生命の場合ではその内の九割七分強が責任準備金、利益配當準備金、支拂備金（圖鑑第三七頁、本解説書第三〇頁参照）となつてゐます。即ち会社側から云へば加入者に對する負債、加入者側から云へば会社に對する債権といふことになるのです。つまり会社の資産の内殆んど大部分が加入者のものといふことになるわけです。これ等のことは、会社で毎年公表する貸借對照表に明示してあります。安田生命昭和十二年度の貸借對照表を見ますと、負債の方に株金三十萬圓とあり、資産の方には未拂込株金二十二萬五千圓となつてゐます。ですから實際に株主の拂込んだ株金は差引七萬五千圓といふことになります。【註、株主配當金はこの七萬五千圓の年六分、即ち四千五百圓といふことになります。（圖鑑第三八頁参照）】

そこで、前述の貸借對照表を見ますと資産合計額は一二九、九〇八、五五四〇、三六〇となつてゐますが、この中には實際に拂込んでゐない未拂込株金一二五、〇〇〇〇〇を合んでゐるわけですから、これだけを差引いた一二九、六八三、五五四〇、三六〇が正味の資産といふことになります。この金額の千圓未満を四捨五入したのが表に示してある金額です。

八、責任準備金 加入者が死亡したり、保険契約が満期になつた場合、保険金を支拂ふために積立てゝある金のことです。

九、利益配當準備金 加入者に利益配當を行ふといふことは約款に定められてゐますが、会社

では年々の利益金の九割以上を加入者のために積立てゝ行きます。これを利益配當準備金といひます。

十、収入利息 資産は決して死蔵してゐるものでなく、色々な方面に投資されてゐます。

（本解説書第二八頁参照）従つてこれ等から年々利息が生れて來ます。これを収入利息といひます。

次に会社の經營が堅實かどうかといふことは圖鑑第四十六頁に掲げてある事業費率、収益率によつてもみることが出来るのです。会社が仕事をして行くにはどうしても経費がかかります。これを事業費と云ひますが、大別すると社費、代理店手数料、紹介手数料、醫師報酬の四つに分けることが出来ます。これ等の一つ一つに對する説明は略しますが、兎も角会社が大きくなるに従つて事業費は嵩んで來るのは當然でせう。ですから、事業費の金額が多くなつて來たから、また他の会社よりも多く費つてゐるからその会社は駄目だとは言へないのです。

茲で繰返して保険料の構成を考へてみなければなりません。本解説書第五十一頁に述べてある通り保険料は純保険料と附加保険料とから成立つてゐるもので、この内附加保険料が事業費に充てられる部分です。即ち加入者から徴収した保険料の一部分が事業費となるものですから、収入保険料に對し幾らの割合で経費を費つてゐるかといふことを知つて、これを比較してみるのが一番公平な見方なのです。この割合を事業費率と言つてゐます。これを第四十六頁の上圖に就て説

會社經營の
堅實性
（圖鑑四六頁）
事業費率
（圖鑑四六
頁）

優秀な契約内容
(圖鑑四七、四八頁)

住友	四九、九八七	六九、一七六	五九、五八一
三井	六四、五六九	七九、八六七	七二、二一八

(5) 優秀な契約内容

契約が如何に大きくなつてもその内容がシツカリしたものでなくてはなりません。たゞ無暗に新契約を作つて行きましても充實した内容のものでなければ、結局砂上の樓閣のやうなもので何時毀れてしまふか判りません。折角新契約費を費つても、それが次から次へと減つて行つたのでは経費ばかりかゝつて少しも肉にはなりません。會社の血となり肉となる契約が堅實に殖えて行つてこそ會社は鞏固となり利益も自然に多く生れて來るわけです。利益が多くなればなる程、加入者への分配高も多くなり、結局得をするものは加入者といふことになるのです。だから保険に加入するに當つては會社の持つてゐる契約の内容が立派なものであるかどうかといふことを調べてみる必要が起つて來ます。それを知るには色々な角度から契約内容を見なければなりません。第四十七頁と第四十八頁に掲げて置きましたやうに

- (イ) 早期死亡の少ないこと
- (ロ) 實際死亡率の低いこと
- (ハ) 失効解約の少ないこと

優秀な契約内容の条件

の三點が最も大切なものなのです。

(イ) 早期死亡の少ないこと

早期死亡
(圖鑑四七頁)

早期死亡といふのは読んで字の如く契約後幾年も経たない内に死亡する契約のことです。普通契約後五年以内の死亡を早期死亡と言ひます。

生命保険は契約の期間が最短十年、最長七十年にも及ぶもので、保険料は期間中掛けて行くものです。實際には利益配當を差引して掛けますから、或る期間後は反對に會社の方から保険料を超過した配當金は現金で受取るやうにはなつて來ますが、原則としては全期間同じ保険料を掛けることになつてゐます。勿論保険料は死亡者に年々保険金を支拂つて行けるやうな計算になつてゐますが、早期死亡が多いれば多いただけ會社の經營が不確實になり、これと反對に少ければ少いだけ安全性が増して來るわけです。

第四十七頁の眞中の表は主要會社の昭和十二年度に於ける總死亡金額と、五年以内の死亡金額を掲げ、五年以内の死亡を總死亡で割つた率、即ち總死亡の内幾%が早期死亡であつたかといふ割合を示したもので、周囲の圓はこれを圖にしたものです。例へば安田に例をとりますと、眞中の表で總死亡は五、三四七、〇〇〇^円、五年以内の早期死亡は二、二七一、〇〇〇^円ですから、後者を前者で割つた割合四二%四七が總死亡に對する早期死亡の割合です。圖で見ると圓全體が總死

亡、その内赤線の部分が早期死亡で四二%四七に當ります。各社とも圖の見方は安田生命の場合と全く同じですが、これで見ても安田生命の契約は早期死亡の一番少ない優秀なものであることが分ります。

實際死亡率
(圖鑑四八頁)

(ロ) 實際死亡率の低いこと

(イ)ではたゞ早期死亡のみについてみたのですが、更に總死亡が豫定に對しどうなつてゐるかといふ點について調べてみなければなりません。會社では毎年豫定死亡といふものを一定の標準の下に算出します。即ち、今年はこれだけの人が死亡してもよい。これだけの保険金は支拂つても差支へないといふ豫定を定めるのです。ところが、實際には死亡がこの豫定を超過する會社もあるし、又超過しない會社もあります。超過する會社は非常に少なく、大抵の會社では大なり少なり超過してゐないのが實情です。

右に述べた實際死亡が豫定死亡に對する割合、即ち實際死亡を豫定死亡で割つた率が低い程よいわけです。その理由は率が低ければ低いだけ利益金の源泉の一つである死差益(本解説書第三一頁参照)がそれだけ多くなるからです。第四十八頁の上圖は財閥三社を比較したものです。この比率は右に述べたやうなわけで、人員から見たものと金額から見たものとがありますが、こゝでは人員からみた實際死亡率を比較してあります。

(ハ) 失効解約の少ないこと

失効解約並に失効解約率に就いては本解説書第三十九頁に述べて置いた通りですが、圖鑑第四十八頁下圖は昭和十二年度に於ける失効解約高と失効解約率(對年始契約)とを財閥三社について比較を試みたものです。この圖でみても判る通り安田生命の失効解約は金額に於ても率に於ても一頭地を抜いてゐることが判ります。左に参考のため年始現在契約高、失効解約高、失効解約率を示して置きます。

	年始現在契約高	失効解約高	失効解約率
安田	五〇五、五七五 <small>千円</small>	二〇、六五二 <small>千円</small>	四・〇八%
住友	四六三、四五九	二二、六八五	四・八九
三井	五二四、三七五	二八、四八七	五・四三

以上を綜合して考へてみますと、安田生命は良い會社としての條件を完全に備へてゐるばかりでなく、他社に比べて一頭地を抜いた最優秀の會社であるといふことがハッキリお判りのことと思ひます。

そこで次には第二章に移つて『良い保険の條件』に就いて説明すると共に、安田生命の保險が如何に優れたものであるかといふことを研究してみたいと思ひます。

失効解約率
(圖鑑四八頁)

第一章の結論

良い保険の条件

第二章 良い保険の条件は？

先づ良い保険の条件は何か、といひますと結局

- (1) 安い掛金
- (2) 有利な約款

の二點に歸着して來ます。

安い掛金

(1) 安い掛金

掛金が安く、約款が加入者に有利なものだとすれば、良い保険としての条件は完備してゐるわけですが、然し、たゞ掛金が安いと言つてもその根本がシツカリした合理的なものでなければなりません。

そこで、先づ順序として加入者から徴収する保険料は一體どういふ風にして計算されるものであるかといふことを説明して、順次本題に入つて行きたいと思ひます。第四十九頁に「保険料の仕組」といふ題で保険料の計算される順序を示して置きました。保険料計算の基礎となるものは死亡生残表です。死亡生残表は人口統計だとか生命保險會社の實際の経験などを基として作成さ

保険料の仕組 (圖鑑四九頁)

死亡生残表

れます。

翻つて我々の壽命を考へてみますと、早死にする人もあり、長壽を保つ人もあり、全く各人各様で測り知ることが出來ません。然し何十何百萬人といふ多數の人を集めて、その死亡状態を統計的に調べてみますと、大體一貫した死亡状態が判るのです。専門的な言葉で言ひますと「死亡の確率」又は「死亡率」と言ふものが發見されるのです。個々の場合では不確かな死亡状態も、斯うしてみますと「確からさ」が判つて來るのです。この死亡率を基として、人が漸次死亡して行く状態を示したのが死亡生残表です。死亡生残表の種類は日本や外國で作られたものを合しますと實に多數に上つてゐますが、安田生命が昭和種養老に使用したものは商工省日本經驗生命表中件數男子全總合表といふものです。この死亡表は云ふまでもなく日本人の死亡表で、實狀に適した點に於て我が國で最も權威あるものです。商工省日本經驗生命表とはどんなものであるかといふことに就いては圖鑑第五十頁に掲げて置きました。又第五十一頁には商工省日本經驗生命表(件數男子全總合表)、藤澤氏第二表、三會社表の三つを比較してありますが、「何人」とあるのは千人に對する死亡人員を示したもので、死亡率に當ります。小さい枠内の圖は商工省日本經驗生命表の件數男子全總合表と件數男子三年截斷表との死亡率を比較したものです。

この死亡生残表を基として、これに豫定利率を織込んで計算したものを純保險料といひます。元來、生命保險といふものは、多數の人が集つてお互ひが死亡した場合、又満期となつた場合に

商工省日本經驗生命表 (圖鑑五〇頁)

死亡生殘表の比較 (圖鑑五一頁)

純保險料とは？

安い掛金

保険金を受取るのが目的ですが、それにはお互ひに金を出し合つて行かねばなりません。これが保険料なのです。それでは一體どれだけの保険料を毎年出して行けば早死した人も満期まで生存した人も目的の保険金を受取ることが出来るかといふことになつて來ます。

こゝで考へてみなければならぬことは、金といふものゝ性質です。金を土の中に埋めたり、空倉に藏ひ込んでゐたのでは元金は何時まで経つてもそのまゝですが、これを生かして使へば利子を生みます。ですから會社では保険料は一瞬の絶え間なく投資して利息を生むことに努めてゐるのです。

豫定利率
(圖鑑五二頁)

それでは一體どれ位の利率で利殖して行けばよいか、といふことを先づ定めて掛からなければなりません。この利率を豫定利率と言ひまして、その時代の金利狀勢や將來の見透しに従つて豫定利率を定めることになつてゐます。從來の豫定率には三分五厘といふ例外はありましたが普通一般には四分だつたのです。ところが、最近金利が非常に低下したために漸次豫定利率も低下する傾向にあります。

安田生命が昭和新疆養老に用ひた豫定利率は三分五厘です。最近では豫定利率を三分とする會社も出て來ましたが、豫定利率が餘り低いと却つて保険料が高くなるし、それかと云つて利率が高いと保険料は安くなるが時代に適應しないといふことになります。従つて會社の資産運用に誤りなく、經營の確實を期し、尙加入者奉仕の徹底を期するためには三分五厘程度の豫定利率が最も

純保険料の
概念

も適當なものと言はねばなりません。第五十二頁には主要會社の豫定利率、並に市中金利、各種投資物利廻を掲げて置きましたから御参考にされたいと思ひます。

以上述べた死亡生殘表と豫定利率によつて計算されたのが純保険料で、この純保険料だけあれば立派に保険金を支拂つて行つて過不足のないやうになるのです。こゝで純保険料の概念を述べる必要があります。例へば今千人の人が同時に同じ種類の保険に千圓づゝ加入したとします。そして最初の年に十人死ぬと假定すると保険金一萬圓(十人分)を千人で負擔すればよいことになり、その翌年又十人死ぬと假定すると保険金一萬圓は九百九十人(第二年初めの生殘者)で負擔しなければなりません。従つて初めの間は生殘者の數が多いが、段々年が経つにつれて生殘者が減つて來ますから一人當りの負擔は段々重くなつて行きます。だから、始めの間は掛金が少なくて年が経つにつれて掛金が多くなるならなければならぬわけですが、それでは何かにつけて不便ですから、このやうな不便を除くために平均した保険料を最初から終りまで取るやうにしたのが、こゝに言ふところの純保険料です。ところが、會社で保険を經營して行くためには種々の經費がかかります。新契約に對する費用だとか、契約を長く維持して行くための費用などが要ります。この費用は右に述べた純保険料に附加して加入者から徴收するのです。この經費に當る部分を附加保険料と言ひます。この附加保険料は、純保険料に一定の率(附加率といふ)を掛けたものです。この附加保険料を純保険料に加へたものが加入者から徴收する保険料で營業保険料といひます。

附加保険料

營業保険料

純保険料の計算 (圖鑑四九頁)

然らば純保険料はどういふ風に計算されるかと言ひますと、その一例として第四十九頁に三十歳加入十五年満期保険金一千圓について計算方法を掲げて置きました。先づ五年目のところに就いて説明しますと、五年度の死亡者数は死亡生残表(商工省日本經驗生命表)によつて六百三十五人といふことが判ります。この六百三十五人に一千圓づゝの保険金を支拂ふものとすれば六三五、〇〇〇圓の金が必要とす。この金は五年後に支拂ふ保険金ですから、これを加入當時の金に引直してみますと五三四、六五〇圓(九五圓(六三五、〇〇〇圓)に豫定利率三分五厘の一圓の現價〇・八四一九七を掛ける)となりす。

【註】 現價といふのは年幾らかの利率で利殖して或年後に一圓の金を得るためには、今幾らの金があればよいかといふことを示したものです。前の例で見ますと、安田生命は三分五厘の豫定利率で利殖することになつてゐますから、年三分五厘で利殖して五年後一圓となるためには、今八十四錢一厘九毛七糸あればよいといふことになりす。これを逆に考へると、今八十四錢一厘九毛七糸を年三分五厘の複利で利殖して行くと五年後には一圓になりす。

又同じ年の生存者は八萬四千三百四十三人ですから、各人から一圓宛取立てるものとすれば八四、三四三圓となりす。これも五年後に取り立てる金ですから、加入當時の金に引直すには前と同じやうに現價の〇・八七二四四を掛ければよいのです。これを計算しますと七三、四九九圓八六三九二となりす。(この現價が前に述べた現價と相違する譯は、前のは年度の終りに拂ふ金の現價であり、後のは年度の初めに取立てる金の現價だからです) 第一年度から満期までの支拂

保険金の現價及び生存者一人より一圓宛取立金の現價を合計しますと、表の通り

- (A) 支拂保険金の現價 五三、五三三、九〇三、〇九
- (B) 生存者一人より一圓宛取立金の現價 九八五、三七八、五〇六、七七

となりす。即ち、十五年間及満期の時に支拂ふ保険金を加入當時の金額に直すと(A)のやうになります。ところが、毎年始めに生存者から一圓宛取立てるものとすれば(B)だけ必要なのですが、実際には(A)だけ取立てなければならないのですから、表下部に算式を以て示して置きましたやうに、(A)を(B)で割つた五四・三三は生存者より一圓宛取立てる現價の五四倍三三、即ち五四圓三三錢で、これが純保険料です。

次に附加保険料は五四圓三三錢に附加率〇・二六四を掛けた一四圓三四錢です。従つて五四圓三三錢(純保険料)に一四圓三四錢(附加保険料)を加へた六八圓六七錢が營業保険料で、實際加入者から取立てる保険料となりす。

右のやうにして算出された保険料は、原則として加入の時から満期まで毎年同じ額を掛けなければならぬものですが、実際には利益配當があつてその拂込保険料と差引することになつてゐますから、掛金の高い安いは主としてこの利益配當の如何に負ふところが極めて多いのです。

利益配當については圖鑑第五十三頁から第五十七頁までの間に述べてあります。利益配當の方法は各社とも保険種類に従つて約款中に定めてありますが、これを大別しますと確定配當と不確

加入者利益配當 (圖鑑五三頁より五七頁まで)

定配當とに分けることが出来ず。確定配當といふのは、配當額を初めから定めてあるものですから、會社では利益の有無に拘らず嫌でも支拂はなければならぬものです。従つて嚴密な意味から言ふと利益配當とは言へないわけです。利益の有るところに始めて利益配當はあべき筈ですから、不確定配當の方が本當の利益配當です。即ち、利益金があれば配當し、無ければ配當しないと云ふのが眞の利益配當です。

利益配當の方法には「保険料の何分累加」といふものと「保険料積立金の何分」といふものがあります。安田生命の配當方法は前者に屬するもので、第六目年から五分累加配當を行ひます。即ち、契約第六年目には年拂保険料の五分、七年目には一割、八年目には一割五分といふ風に配當率が年々五分づつ累加して行くのです。又後者に屬するものには日本生命、又は明治生命の舊保険種類などがあります。日本、明治共に保険料積立金の三分一厘五毛となつてゐます。例へば五年目の配當金は第三年半目の保険料積立金の三分一厘五毛といふ風に計算されます。

第五十三頁には二十五歳加入三十年満期保険金一萬圓の契約につき五分累加(代表安田)、四分五厘累加(帝國)、四分累加(第一)、保険料積立金の三分一厘五毛(日本)の代表的四方法に於ける配當金總額を山の大きさで表はし、又正味掛金(正味掛金は營業保険料から配當金を差引した掛金)を瀧の高さで示してあります。配當金の一番多い安田生命は、正味掛金が一番少いことが判ります。安田生命の掛金が絶対に安いことはこの圖がハッキリ示してゐます。

高率配當の最高峰 (圖鑑五三頁)

加入者利益配當率の變化 (圖鑑五四頁)

昭和各種養老の配當方法 (圖鑑五五、五六頁)

更に配當率五分累加(安田、明治新種、三井新種)、四分五厘累加(帝國)、四分五毛累加(住友)、四分累加(第一)、保険料積立金の三分一厘五毛(日本)の各々の場合に於ける配當金總額(保険料百圓に對する)を三十年満期について比較してみますと、第五十四頁の圖中、圓のやうな割合になります。又同頁右下の表は配當率の變化の状態を數字で表したもので、この表のやうに年々累加して行く配當率の變化を圖で示しますと、中央に線で示してある通り年の進むにつれて段々配當率の差が甚しくなつて來ることがよく判ります。これを以てみても、安田生命の五分累加配當は、保險値段を決定する上に如何に有利なものであるかといふことが判つたこと、思ひます。

それでは安田生命昭和各種養老の配當方法はどうかと言ひますと、第五十五頁及第五十六頁の圖のやうになります。第五十五頁は三十歳加入三十年満期保険金一萬圓、第五十六頁は四十歳加入八十歳満期保険金一萬圓の例です。第五十五頁に就いて説明しますと、緑線が掛金で、赤の横線の部分が營業保険料から差引きする利益配當金です。即ち第一目から五年までは緑線の三五九円二〇銭(營業保険料)づつ掛けますが、第六年目になりますと赤の横線で示した一七〇九六銭の利益配當がつきます。この利益配當を營業保険料の三五九円二〇銭から差引いた三四一円二四銭即ち緑線の部分だけ拂込めばよいといふことになります。順次斯うして行きますと、第二十五年目には營業保険料と配當金とが同額になりますから、差引掛金は零になります。二十六年目から

は配當金の方が營業保険料よりも多くなりますから、配當金から營業保険料を差引いた残額一七〇九六圓七即ち赤で塗り潰した部分だけ現金で支拂はれることとなります。そこで、營業保険料と差引いたものでも又現金で受取つたものでも配當金と名のつくものを合計しますと、その總額は八、三五一〇四〇圓となり、二十五年間に實際拂込んだ掛金は五、二〇八〇四〇圓、二十六年目から満期及満期後四年間の現金配當は二、七八三〇八〇圓となりますから、實際掛金から現金配當を差引いた正味掛金二、四二四〇六〇圓で一萬圓の保険金を受取ることが出来るわけです。次の第五十六頁も圖の見方は同じですから説明を省略します。

正味利得金
(圖鑑五七頁)

第五十七頁の正味利得金といふのは、途中で死亡した場合でも満期になつた場合でも保険金一萬圓は手に入りますが、實際には毎年掛金するので、途中死亡又は満期の時までの掛金累計額を保険金から差引いたものが眞の儲けとなるわけです。この儲けを正味利得金と云ひます。圖は三十歳加入三十年満期の例ですが、赤線と緑線を合した全部の長さが保険金の一萬圓で、その中から掛金を年々累計した緑線の部分を差引いた赤線が正味利得金です。尙満期となつた場合には満期後の配當がありますから、正味利得金中特に満期後配當がどれだけあるかといふことを明示して置きました。

掛金の他社との比較
(圖鑑五八頁より七二頁まで)

以上で、安田生命の保険はその計算の基礎が合理的で、掛金も安いといふことは判りましたが他社のそれと比較してどうか、といふことを第五十八頁以下第七十二頁までの間で研究してみたいと思ひます。

合理的な栽培法
(圖鑑五八頁)
日本生命との比較

先づ保険料の安い高いを知る上に一つの面白い例をお話しませう。

第五十八頁「合理的な栽培法」の圖は生命保険を一つの木にたとへてみたものです。この生命保険の大樹も、先づその苗を植ゑつけ、さうして水を與へ肥料を施して育て上げて行かねばなりません。その肥料は取りも直さず掛金です。

今例を安田生命と日本生命にとつてみますと、二十五歳の時三十年満期一萬圓の保険に加入したと假定すれば、最初の掛金は安田生命は三五〇円二〇圓ですが、日本生命は三〇〇円でよいのです。これだけで見ると安田生命に加入するのは如何にも馬鹿く／＼しいやうに思はれますが、實際は全く反對なのです。即ち一萬圓の保険金を受取るのに安田生命では満期までに正味掛金二、三六三円八五圓でよいのに、日本生命では五、三七〇円九五圓(圖鑑第六〇頁参照)も掛けなければならぬのです。どうしてこんな大きな差が出来るのかと言ひますと、それは利益配當金が非常に違ふからです。本解説書第五十四頁で述べたやうに安田生命は第六年目から年拂保険料の五分累加配當ですが、日本生命は五年目から僅かに保険料積立金の三分一厘五毛といふものに過ぎないので、安田生命では年々多額の配當金を保険料から差引しますから非常に急速に掛金が減つて行きますが、日本生命では配當金が少ないためその減り方が非常に少ないのです。これが積り積つて満期の時には非常な開きが出来て来るわけです。ですから、安田生命のやうに始めの内に充分な肥料(掛金)を施した保険の若芽は後になつて段々肥料が少なくなり、遂には肥料が少し

も要らなくなつてしまふのです。そして成長した樹を見ますと枝振りは頑丈だし、配當の實は大きなものが生ります。これに反し日本生命のやうに始めの内に僅かの肥料を惜しむと、何時まで経つても肥料をやらねばならないのです。第五十八頁の圖の右半分が安田生命、左半分が日本生命ですが、肥料代、配當の實の大小、樹の繁茂せる状態を比較して戴けば自ら兩社の保険の優劣が判ります。

又保険の加入から満期までを汽車旅行に譬へてみたのが第五十九頁です。加入を東京とし、満期を大阪とします。今東京から大阪に行くには東海道線、中央線、信越線廻りの三つがありますこの三つの三等汽車賃を比較してみますと、右上部にあるやうに東海道線は五圓九十七錢で一番安くなつてゐます。その次は中央線の六圓三十二錢、信越線の七圓四十九錢といふ順序です。そこで安田、日本、第一の三社の三十五歳加入三十年満期保険金一萬圓を満期まで繼續した場合の正味掛金（正味掛金に關しては本解説書第五頁「昭和種養老の配當方法」の項参照）を調べてみますと

- 安田生命（昭和種） 二、五八一、九五
- 日本生命（養老、二十年拂込三十年満期） 三、二四五、四四
- 第一生命（養老） 四、〇六八、七八

右のやうになります。これを前に述べた賃金に當嵌めてみますと、安田生命は東海道線、日本生命は中央線、第一生命は信越線廻りに相當します。そこで、この三つの線路を比較してみます

どの線路を
採りますか
(圖鑑五九頁)

と、風光明媚な海岸線の景色や靈峰富士の雄姿を眺めながら、乗心地よい東海道線の超特急で旅行する方が一番よいことは言ふまでもありません。然かも賃銀が一番安いと來てゐるのですから誰でも東海道線を撰ぶでせう。ところが實際を見ますと中央線や信越廻りの生命保険に乗る人があるのですから浮世は様々だと申さねばなりません。安田生命の東海道超特急は他の線に比べて最初の掛金は幾らか高くなつてゐますが、圖鑑第五十八頁「合理的栽培法」で説明したやうに結局非常に安い掛金となるばかりでなく、完備せる設備と満點のサービスにより乗心地よく目的の大阪、即ち満期に着くことが出来るのです。この安田生命の完備せる設備と満點のサービスに就いては「有利な約款」(圖鑑第七三頁より一〇二頁まで、本解説書第六八頁より第九六頁まで)のところで詳しく説明しますが、大體を言ひますと約款が非常に優れてゐること、特に五大特長として拂濟證券、振替貸付、延長保険、保険料の一時拂、保険金の分割拂の制度が完備してゐますから、何時どんな障害が起つても掛け續けに心配なく、また保険料を一時に拂込めば年五分の複利で割引き、途中死亡の場合には將來の掛金の現價は返して呉れますから少しも損にはなりません。また保険金分割拂の方法がありますから、受取つた保険金の浪費を防げるばかりでなく、この分割拂には年々利息配當金がつくことになつてゐますから非常に有利なものです。

斯様に研究して來ますと、安田生命こそ本當に加入してよい會社といふ結論に到達しますが、更に各社の掛金を實際について比較研究してみませう。

十大生命正味掛金の比較
(圖鑑六〇頁より六四頁まで)

先づ第六十頁から第六十四頁までの「十大生命正味掛金の比較」について説明しませう。全部二十五歳加入三十年満期保険金一萬圓についての例です。安田生命の表は圖鑑第五十五頁、本解説書第五十五頁に説明した配當方法を表にしたもので、ただ加入年齢が二十五歳といふだけの違ひです。そこで合計欄をみますと、保険料三十年間の合計は一〇、五〇六円になりますが、利益配當が八、一四二円一五錢ありますから差引正味掛金は二、三六三円八五錢になります。この正味掛金は二十五年間の實際掛金の合計から、二十六年以降満期及満期後の現金配當を差引いたものと同額になります。日本生命の方は、第五年目から毎年保険料積立金の三分一厘五毛の利益配當をします。第五年目の配當金は表の通り一八円八〇錢、六年目は二四円七二錢ですからこれを營業保険料三百圓から差引いたもの、即ち五年目は二八一円二〇錢、六年目は二七五円二八錢が掛金となります。合計欄を安田生命の場合と同じやうにして見ますと、正味掛金は五、三七〇円九五錢です。安田生命と比較して非常に高いことが判りませう。尙表の上部にある圖は、この正味掛金を安田生命と比較したものです。真中の赤線は保険金一萬圓を示し、上の青線が安田、下の青線が日本の正味掛金です。以下六十四頁の野村生命まで、表の見方は全く日本生命の場合と同じですから説明を省略します。

第一生命の出世保険との比較
(圖鑑六五頁)

次には、三十歳加入三十年満期保険金一萬圓について第一生命の出世保険と、安田生命の昭和
新種養老とを第六十五頁で比較してみませう。先づ出世保険とはどんなものかといふことから説

出世保険とはどんなものか

明して行きます。

出世保険といふのは第一年目即ち加入する時の保険料が非常に安く、第二年目から保険料が年々高くなつて行き第六年目から最後の年まで同じ保険料となる仕組です。今三十歳加入三十年満期保険金一萬圓について具體的に述べますと、第六年目以後の年拂保険料は三七〇円二〇錢ですが、加入の時の保険料はその五割の一八五円一〇錢でよいのです。第二年目には六割の二二二円一二錢、三年目には七割、四年目には八割といふ風に漸次高くなつて行き、第六年目から十割即ち三七〇円二〇錢となるのです。第六十五頁の上部に第六年目までの保険料を掲げてあります。

この出世保険も他の保険と同じやうに四分の累加配當になつてゐますが、配當金の計算には少し注意が必要です。普通の保険なら第五年目の配當金は年拂保険料に四分を掛け、第六年目には八分といふやうに四分づつ増加した率を掛ければ配當金が出て來ます。ところがこの方法は簡便法でありまして、本當の計算方法は第五年目は年拂保険料に四分を掛け、第六年目は年拂保険料を二倍したものに四分を掛け、第七年目には年拂保険料を三倍したものに四分を掛けるものなのです。(安田生命の場合でも配當率が違ふだけで同じ方法です)

そこで、この觀念を頭に置いて出世保険の配當金計算方法を考へて見ませう。出世保険は年拂保険料が前に述べたやうに最初の五年間は毎年違つてゐますから簡便法を使ふことが出來ません。従つて年拂保険料の和に四分を掛けるといふ方法を探らねばなりません。文章で説明する

出世保険の配當金計算方法

よりも計算を式で示した方が判り易いと思ひますから、次の計算式で御承知願ひます。

第五年目の配當	$185.10 \times 0.04 = 7.40$
第六年	$(185.10 + 222.12) \times 0.04 = 16.28$
第七年	$(185.10 + 222.12 + 259.14) \times 0.04 = 26.65$
第八年	$(185.10 + 222.12 + 259.14 + 296.16) \times 0.04 = 38.50$
第九年	$(185.10 + 222.12 + 259.14 + 296.16 + 333.18) \times 0.04 = 51.32$

第十年目からは毎年三七〇円二〇銭の四分づゝ加はつて行くことになり、前記から前に述べた簡便法を使ふことが出来るわけです。即ち第十年目は三七〇円二〇銭の四分、十一年目は八分といふ風にして算出した金額に第九年目の配當を加へればよいのです。ところが配當金は全部錢以下を切捨てることになつてゐます。従つて、第九年目の配當金も五一円八二銭となつてゐますが、實際に計算した結果は五一円八二銭八厘で、その錢以下の八厘を切捨てるので、十年以後の配當金を計算する場合には、この五一円八二銭八厘を加へてその結果生じた厘位を切捨てる必要はありません。計算例を左に掲げてみませう。

第十年目の配當	$370.20 \times 0.04 = 14.808$	$14.808 + 51.828 = 66.636$
第十一年	$370.20 \times 0.08 = 29.616$	$29.616 + 51.828 = 81.444$

第十一年	$370.20 \times 0.12 = 44.424$	$44.424 + 51.828 = 96.252$
------	-------------------------------	----------------------------

右の答の厘位を切捨てたもの、即ち第十年目の配當金は六六円六三銭、十一年目は八一円四四銭、十二年目は九六円二五銭といふ風になります。この配當金を保険料から差引いたものが實際の掛金で、第六十五頁の圖に緑色で示してある金額に當ります。又圖の赤線及赤數字は安田生命の掛金の状態を現はしたものです。右の方にある横線になつてゐる部分は現金配當を示してゐます。

そこで、この二つの保険を比較してみますと、最初の五年間は出世保険の方が遙かに掛金が安くなつてゐますが、第六年目からは反對に安田生命の方が安くなります。さうして安田の方は二十五年目には掛金は零となり二十六年目から現金配當を受けることになり、出世保険の方は満期まで三十年間掛金しなければならぬし、満期になつても配當金額は安田生命の方が遙かに多いばかりでなく、回数も安田が五回であるのに対し出世保険は四回ですから安田の方が一回多くなつてゐます。

然らば、結局どちらの方がどれだけ利益かといふことになつて來ます。出世保険の正味掛金は四、三〇一円八五銭（掛金合計 5,901.10—現金配當 1,599.25）であるのに對し、安田生命の正味掛金は二、四二四円六〇銭（掛金合計 5,208.40—現金配當 2,783.80）ですから、差引一、八七七円二五銭だけ安田生命の方が有利といふことになります。

第一生命の八十五歳満期と安田生命の八十歳満期の比較 (圖鑑六六、六七頁)

次には、安田生命の八十歳満期を第一生命の八十五歳満期と比較してみませう。第六十六頁及六十七頁に掲げたのは兩社共に四十五歳加入保険金一萬圓の場合です。この表で配當金及正味掛金については説明の必要はないと思ひますが、安田生命の方が五年早く満期となりますから、満期の時に受取つた保険金一萬圓を年三分五厘に廻しますと、毎年三五〇圓づゝの利息が入つて來ます。この利息は五年間に一、七五〇圓となり、又第二十六年目から満期及満期後四年間に入つて來る現金配當は五、一七五圓四六錢、ところが加入して以來二十五年間に掛けた掛金が六、八二二圓三〇錢ですから、表中最下部の式のやうに入つて來た金の合計と實際掛金との差が正味掛金になるわけですが、これを計算してみますと入つた金の方が一〇三圓一六錢だけ多くなり、即ち一〇三圓一六錢配當超過になるのです。言葉を換へて言へば、一萬圓の保険金を受取つた上にお剩りが一〇三圓一六錢來ることになります。第一生命の方でみますと、安田生命が満期後の配當を全部受取つてしまつた年の翌年が満期になるわけですから、安田と比較する場合保険金を利殖する暇がないわけです。従つて現金配當と實際掛金との差が正味掛金といふこととなります。表中最下部の式を計算しますと、正味掛金は三、一三五圓六〇錢となり、兩者の差の非常に大きいことが分ります。これを圖で示しますと第六十七頁のやうになります。赤色が安田で綠色が第一です。尚第六十六頁の正味掛金計算に關する金額は六十七頁の上部に再掲してあります。又圖の下部にある正味掛金の表は、右に述べたと同様な方法で計算した結果だけを三

日本生命の八十五歳満期と安田生命の八十歳満期の比較 (圖鑑六八頁)

千代田生命の七十五歳受取と安田生命の三十年満期の比較 (圖鑑六九頁)

日本生命の短期拂込保険と安田生命の比較 (圖鑑七〇頁より七二頁まで)

十歳から五十歳まで五歳飛びに掲げて参考に供しました。

第六十八頁の表は四十歳加入保険金一萬圓の場合に於ける安田生命の八十歳満期と日本生命の二十年拂込八十五歳満期とを比較したもので、計算は全く第六十六、七頁の第一生命の場合と同様です。

第六十九頁は四十歳加入保険金一萬圓の場合に於ける安田生命の三十年満期(即ち七十歳満期)と、千代田生命の七十五歳受取とを比較したものです。第一、日本の場合と異なる點は兩者の比較を正味掛金とせず正味利得金としたことです。正味利得金といふのは保険金から正味掛金を差引いた金額で實際に儲かる金のことです。この表で見ますと、表の最下部に示してある通り安田生命は満期保険金一萬圓と満期保険金の利息一、七五〇圓の合計から正味掛金二、八六二圓七五錢を差引いた八、八八七圓二五錢が正味利得金になります。千代田生命の場合では満期保険金から正味掛金を差引いた五、七八四圓一八錢が正味利得金です。ですから三、一〇三圓〇七錢だけ安田生命の方が有利になります。

次の第七十、一、二頁は日本生命の短期拂込保険との比較です。日本生命の短期拂込は、同社が「無敵保険」と稱して盛んに宣傳してゐるものですが、果して同社が宣傳する程有利なものかどうかといふことを研究してみたいと思ひます。

第七十頁は日本生命の三十五歳加入十五年拂込三十年満期保険金一萬圓に加入した場合と、安

田生命の三十年満期に加入した場合を比較したものです。

先づ日本生命の方から見ますと、表にある通り配当金を年拂保険料から差引いたものが正味掛金で、これを年々累計して行きますと（現金配当は差引きします）掛金累計欄のやうになります。この掛金累計を保険金の一萬圓から差引いたものが「途中死亡又は満期正味利得金」欄にある金額です。即ち、日本生命では満期又は途中で死亡した場合には、この欄にある金額が正味儲けとなるのです。次にこゝで考へて見たいことは、兩者の掛金です。日本生命は保険金一萬圓の保険料が四五八円、安田生命は三八二円五〇銭です。従つて日本生命に一萬圓加入する保険料を以て安田生命には一万二千圓加入出来た。計算は至極簡単で、日本の保険料を安田の保険料で割つてみれば判ります。式で示しますと

$$458.00 \div 382.50 = 1.1974$$

となります。即ち一萬圓の一・一九七四倍ですから、一萬一千九百七十四圓加入出来ることとなります。千圓以下を切り上げて一萬二千圓の保険金額といふこととなります。

安田生命一萬二千圓の保険金に對する保険料は一萬圓の保険料を一・二倍した四五九円です。日本生命の保険料に比べて一圓高くなつてゐますが結果はどうでせうか。右側にある安田生命の表は日本生命の場合と同じやうに計算したのですが、兩者の正味利得金を比較してみると二十一年目までは安田生命の方が遙かに有利です。二十二年から三十年までの九年間だけ日本生命の

方が有利となりますが、満期になつた場合を見ますと再び安田生命の方が斷然有利になります。こゝで注意しなければならないことは、安田生命の正味利得金を計算する場合には保険金を一萬二千圓として、これから掛金累計を引かねばならない點です。又満期の時の掛金累計は、満期及満期後の配當即ち五回分の配當金合計三、二二三元を三十年目の掛金累計六、三一一円二五銭から差引いた三、〇九八円二五銭となります。

第七十頁の表を圖で示したのが第七十一頁です。赤線が安田、緑線が日本の途中死亡又は満期正味利得金を現はしてゐます。さうして受取保険金は何時でも安田生命は一萬二千圓日本生命は一萬圓ですが、圖に示した受取保険金の線の位置は正味利得金の縦線に對して正確な高さにありますから、この保険金の線と正味利得金の線の間に當る部分が掛金の累計に當るわけです。

第七十二頁は矢張り三十五歳加入保険金一萬圓の場合ですが、日本生命の二十年拂込三十年満期と安田生命の三十年満期との比較です。兩者共保険料がほゞ同じですから保険金は兩者共一萬圓として比較してみませう。

表の金額は日本、安田共に配當金と正味掛金とを掲げて置きました。満期まで繼續した場合の正味掛金は日本が三、二四五円四四銭、安田は二、五八一円九五銭となります。右側の圖は満期時の兩者の正味利得金を比較したものです。

日本生命の年掛保険料は三八九円で、満期までの正味掛金は緑線のやうに三、二四五円四四銭

となります。ところが受取る保険金は赤線の一萬圓ですから、この一萬圓から正味掛金を差引いた六、七五四円五六銭が正味利得金となるわけです。安田生命の方は日本生命の場合と同じ方法で計算しますと、正味利得金は圖のやうに七、四一八円〇五銭となります。従つて安田生命の方が六六三円四九銭有利だといふことが判ります。

斯ふいふ風に研究して來ますと、日本生命の謂ふ「無敵保険」も安田生命の新種保険にかつては全く顔色なしです。安田の新種こそ正に無敵保険と言つてもよいわけです。以上で安田生命の掛金は他社に較べて非常に安いものであることがお判りのことゝ存じます。

先づ、よい保険の第一條件たる「安い掛金」といふ點に就いては、常に業界最低の値段で保険を賣つてゐるといふことをハッキリ知ることが出來たわけですから、次には品質たる約款の研究に移ることゝ致しませう。

有利な約款

(2) 有利な約款

生命保険は掛金が安いといふことだけでは真に良い保険とは言ひ得ないのです。保険の品質即ち約款が加入者にとつて有利親切であるといふことが大切な條件です。

約款といふのは、一口に言ふと加入者と會社の約束を定めたものです。掛金が保険の値段を決めるものなら、この約款は保険の品質を決めるものとなります。例へば、こゝに一個の茶碗を買

約款研究の
必要性

約款の比較 (圖鑑七三頁)

ふ場合を考へて見ましても、たゞ値段さへ安ければ品質が良からうと悪からうと構はないといふわけには行かないでせう。値段が安くて品質のよいものを必ず撰ぶ筈です。まして自分の將來を託さうといふ大切な保険ですから、掛金が安いのみならず約款の良いものを撰ばなければならぬのは當然です。約款の研究が大切な理由は全く茲に在るわけです。

そこで、安田生命の約款の研究に入る前に先づ主要十社の約款を比較對照してみませう。第七十三頁に掲げてある表のやうに重要な項目のみに就いて比較してみますと、安田生命の約款には我國に於て行はれてゐる有利な條項は何れも完備して居り、一目して非常に優れてゐることが判ります。詳しい説明は後で段々やることゝしてその中の一、二について一寸見ても、保険料の一時拂、延長保険、振替貸付利子等に於て斷然他社を壓してゐることがおわかりでせう。

五分の三拍子 (圖鑑七四頁)

では安田生命の約款内容の解説に移りませう。その約款内容を一言にして評しますと、「至れり盡せりの加入者本位の約款である」といふことに盡きてゐます。先づ第一に、第七十四頁に示してあるやうに「五分の三拍子」といふことを擧げなければなりません。即ち、加入者の利益配當(利益配當については圖鑑第五三頁より五七頁まで、本解説書第五三頁より五六頁まで參照)が五分累加、一時拂保険料(一時拂保険料については圖鑑第九四頁より一〇一頁まで、本解説書第八八頁より九五頁まで參照)が五分の複利割引、振替貸付利率が五分(振替貸付については圖鑑第七六頁より八八頁まで、本解説書第七二頁より八三頁まで參照)といふことです。この利率は何れも業界各社中最優秀です。従つ

て、安田生命の保険は、たゞこれだけを以てみても、利益配當が最高なため掛金が掛け易く、一時拂にすれば最高の複利で割引くから、安全な投資物であると共に利廻も非常によくなります。又掛け続け困難な場合でも振替貸付の利率が最低ですから非常に有利です。

たゞ利率といふ点のみから見てもこれだけの優れた特長を持つてゐますが、更に約款全部に眼を通してみますと、第七十四頁に掲げてあるやうな五大特長を發見することが出来るのです。即ち拂濟證券、振替貸付、自働延長保険、保険料一時拂、保険金分割拂の五制度で、共に業界に於て最優を誇り得るものです。代表的五大特長の大體のお話はこれ位にして、これから一つ一つについて順を追つて詳しく説明して行きます。

拂濟證券

(圖鑑七五頁)

I 拂濟證券

拂濟證券といふのは、これから後の掛金を拂ひ込まずして、今まで掛けた掛金の範囲内で行われるだけの保険金額に變更してしまふ方法です。

然らば、その拂濟證券金額はどうして計算するかと言ひますと、拂濟證券に變更する時の解約返戻金（解約返戻金については本解説書第三三頁解約益の項参照）をもとにして「解約返戻金をもとにして」といふのは今少し詳しく言へば、解約返戻金を一時拂保険料にあてることです。その場合の保険料は純保険料

(本解説書第四九頁及び同八八頁「生存法」の項参照)といつて營業保険料より安いので、これによつて計算された保険金額は相當高額になるわけです。一つ實際の例で説明してみませう。二十五歳の時三十年満期に一萬圓に加入した契約を、十五年後に拂濟證券とした場合の計算例が第七十五頁にあります。二十五歳の人が加入後十五年経つて拂濟證券に變更するのですから、その時の年齢は四十歳であり、又残つてゐる保険期間は三十年から十五年を引いた十五年となります。従つて、先づ四十歳加入十五年満期養老一萬圓の一時拂純保険料を計算しますと六、二七五円九〇錢になります。ところが、拂濟證券に變更時の解約返戻金は三、二〇六円ですから、前に計算した一時拂純保険料六、二七五円九〇錢で一萬圓の保険に加入出来るものとすれば、解約返戻金の三、二〇六円では幾ら加入出来るかといふことを計算してみればよいわけです。即ち

$$6,275.90 : 3,206.00 = 10,000.00 : x$$

といふ比例式が成り立ちます。これを計算すると $x = 5,108.53$ といふ答が出て來ます。この答の圓以下を切捨てた五、一〇八円が拂濟證券金額です。

第七十五頁の中央に圓で示した圖は、右のやうな方法で十一年拂込、十五年拂込、二十年拂込後拂濟證券とした場合の拂濟證券金額を、變更前の保険金一萬圓（圓全體が一萬圓）並びに實際掛金と比較したものです。圖のやうにその掛金は少しも無駄にならないことが判ります。又保険金三萬圓が一萬圓の拂濟證券となるには、即ち拂濟證券金額が最初の保険金の三分の一になるには

何年掛ければよいかといふ間に答へたのが同頁下部の圖です。例へば、十年満期なら三年、三十年満期なら十年掛ければよいといふことが判ります。

II 振替貸付

振替貸付
（圖鑑七六頁より八八頁まで）
振替貸付方法と利用價値
（圖鑑七六頁）

振替貸付とはどんな制度かと言ひますと、一言に言へば契約に對する掛金を會社に立替へて貰ふ方法です。この立替金に對しては年五分の利息を拂はなければなりません、その利率が業界中最低のものであることは既に「五分の三拍子」の項で述べた通りです。

ではどんな場合に、この振替貸付といふ制度は加入者にとつて非常に便利なものであるかと言へば(1)加入者が掛金を續けることが困難となつた場合或は(2)或期間中特に多額の保険が必要たといふ場合であります。何故かといへば、

- (1) 掛け續け困難となつた場合でも、振替貸付を利用すれば永く契約の效力を失はず、保険としての目的を立派に達することが出来る。
- (2) 或る期間中特に多額の保険が必要な場合には、初めの契約は振替貸付を利用し、更にその掛金を以て新しい契約に加入すれば、一つの掛金で保険金を倍額にすることが出来る。

斯様に振替貸付の方法があるため加入者の享ける利益は倍加されますが、然らば一體如何なる方法で立替へて呉れるものであるかと言ひますと、その立替へるべき掛金と年五分の利息の合計

振替貸付が
満期まで
續出する最
短拂込年數
（圖鑑七六頁）

額が、掛金を拂込んだものとして計算した解約返戻金の範囲内でさへあれば、何年間でも立替が出来ます。例へば、第七十六頁の圖のやうに二十五歳加入三十年満期の場合ですと四年掛ければ一年半の間は立替が出来ますが、若しその期間内に死亡した場合には保険金から、その時までの立替金元利合計を差引いたものが受取金になります。立替期間の終りに死亡した際の受取金の計算は、保険金一萬圓の場合ですと、圖に附記してあるやうになります。次に四年半掛ければ二年半、五年掛ければ四年半の間立替が出来ますが、五年半掛けると満期まで立替が可能です。そして、満期時の受取金は、圖下部のやうな計算により保険金一萬圓に對し二、七五四円九三錢となります。即ち、この金が満期になつた時加入者の懐に入つて来る金です。更にその後の四年間に一、九九六円一四錢の現金配當がありますから、結局四、七五二円〇七錢受取ることになります。なほ振替貸付前の掛金合計額を圖に附記して置きましたから参考にして戴きたいと思ひます。

以上の説明によつて、二十五歳加入三十年満期では最短五年半掛けさへすれば満期まで有効に繼續出来ることが判りましたが、満期種類別年齢別（五歳飛）に對する最短拂込年數は同頁の下部に示してあります。この表の見方を二十五歳加入三十年満期について説明すれば、表中最左端満期の欄の三〇年のところを右に見て行つて、最上欄年齢二五歳のところを下の方に見て行つたものを行き合つたところにある時、即ち五年半が求むる最短拂込年數です。

【註】各歳の最短拂込年數、其他振替貸付に關する計算は保険經濟研究社發行の「振替貸付寶典」を参照。

圖の見方
(圖鑑七七
頁)

又、右のやうに五年半掛けて振替貸付にした場合の途中死亡又は満期受取金の状態を圖に示しますと第七十七頁のやうになります。例へば、十年目に死亡したとすればその時までの振替貸付金元利合計は一、五二八円三五銭となり、保険金一萬圓からこれを差引いた八、四七一円六五銭が受取金です。圖の圓全體が保険金、緑線が貸付金元利合計、赤線が受取金です。そこで矢印の順に見て行きますと貸付金元利合計及死亡受取金の變化が一目して判りますが、満期となつた場合には、保険金一萬圓の外に満期及満期後の現金配當がありますから、圓はそれだけ大きくなつてゐます。

振替貸付の
計算方法
(圖鑑七八頁)

然らば、この圖の振替貸付金元利合計はどういふ風にして計算したものであるかと言ひますと第七十八頁のやうに、第五年の後半即ち第六年目の後半分の掛金一七三円三五銭を振替貸付にしますと六年末には次の式により元利合計一七七円六九銭となります。

$$173.35 \times (1 + \frac{.05}{2}) = 177.68875 \dots \text{以下同じ}$$

この一七七円六九銭に第七年目の掛金三一五円一八銭を加へたものに(1+.05)を掛けると第七年末の元利合計は五一七円五二銭になります。斯ういふ風に順次繰返し、第二十六年目から第三十年目までの現金配當は前年末の元利合計から引いたものを元金として計算して行きますと第二十九年末の元利合計は七、四七九円八六銭となります。第三十年目の元金は七、四七九円八六銭から現金配當八七円五五銭を引いた七、三九二円三一銭、この元金に(1+.041667)を掛けたものが第三十年

末即ち満期時の振替貸付金元利合計七、七〇〇円三三銭です。

何故最後の年だけ(1+.041667)を掛けるかと言ひますと、元來振替貸付は猶豫期間の二ヶ月が過ぎてから行ふものですから、その利息は猶豫期間經過後からつくわけです。例へば五年半目即ち第六年目の後半分の立替金の利息は、加入した時から計算して第五年八月(五年半に猶豫期間の二ヶ月を加へたもの)末の翌日即ち五年九月の始めから半年目に當る第六年二ヶ月末までのものであり、第七年目立替元金に對する利息は第六年三ヶ月始めから第七年二ヶ月末までの一年間のものなのです。

斯様に順次に押し進めて行きますと、第三十年目の利息は二十九年三ヶ月始めから三十年二ヶ月末までのものといふことになるわけですが、保険は第三十年末で終りとなつてしまひますから立替金の利息も二十九年三ヶ月始めから三十年末までの十ヶ月分でよいといふことになります。従つて、最終年の利率は(.05+.12)×10=.041667 といふのです。

途中死亡の場合の受取金は、前に述べた通り保険金から貸付金元利合計を引いたもので、表中最右欄の金額がそれです。満期の場合の受取金は表の下部の欄外のやうな計算になります。

この計算を各満期各年齢(五歳飛)について調べたのが第七十九頁の表です。即ち、満期まで有効に繼續し得る最短拂込年數に對する計算です。例へば十年満期加入年齢十歳の場合は、表を右の方に見て行くと二年掛ければ満期まで有効で、満期保険金及満期配當金の合計は一〇、三一

振替貸付金
元利合計及
受取金一覽
表の見方
(圖鑑七九頁)

六円三二銭、ところが振替貸付金元利合計が九、六〇七円三七銭ですから、差引七〇八円九五銭が満期に實際加入者の懐に入つて来る金です。續いて、満期後四年間に現金配當として受取る金額が一、七九二円四八銭ありますから、これを満期時の受取金に加へた二、五〇一円四三銭が受取金の合計額となります。

【註】各年齢については「振替貸付寶典」参照。

これまでに述べたものは何れも最短拂込年数に對する計算のみでしたから、次の第八十頁では拂込年数が六年、七年或は十年、十五年であつた場合には受取金はどうなるかといふことを調べてみたいと思ひます。表の見方は第七十九頁の表と同じですから略しますが、拂込年数のところを順次右の方へ見て行けばよいのです。

たゞこの表で特に説明して置きたいことは、拂込年数二十年以後の「満期前、超過配當金」に就いてです。例へば、二十年拂込後振替貸付にしますと、第三十年目には貸付金の元利合計は立派に完済され、逆に配當金の残り分を受取る事が出来るのです。従つて、受取金合計にはこの超過配當を加へなければなりません。いま二十年間掛金して、二十一年目から振替貸付にした場合、貸付金の元利合計が第三十年目に於て完全に返済されるばかりでなく、却つて配當金が貸付金元利合計を超過するため、その超過分が加入者へ支拂はれる状態を表にして左にお目にかけることゝしませう。

拂込年数より見たる振替貸付満期手取金
(圖鑑八〇頁)

【註】ゴチックは現金配當又は超過配當を示す。

年度	掛 金	貸付金合計 元利合計
21	70.04	73.55
22	52.53	132.89
23	35.02	175.79
24	17.51	202.97
25	0	213.12
26	17.51	205.40
27	35.02	178.90
28	52.53	132.69
29	70.04	65.79
30	87.55	21.76

上の表を説明しますと、二十年拂込後振替貸付にすれば第二十年目の掛金から會社で立替へます。元利合計の計算方法は本解説書第七四頁で述べた通りですから省略して、第二十九年末の元利合計を見ますと六五円七九銭になります。ところが三十年目には、この二十九年末の元利合計は現金配當八七円五五銭と差引されるわけですが、現金配當の方が貸付金の元利合計よりも多いため、その差額二一円七六銭は配當金として現金で加入者に渡されます。

圖鑑第八十頁の表の通り、拂込年数二十年では右のやうな計算の結果三十年目に配當超過になります。が、例へば二十一年拂込の場合では二十九年目に配當超過になります。そして、二十九年目の超過分に三十年目の現金配當を加へた二二八円四二銭が満期前の超過配當金となります。拂込年数二十二年、二十三年も同じやうに計算すればよいのです。

次に第八十頁下部の圖は、同頁の上の表中拂込年数五年半、十年、十五年、二十年の分を抽出したもので、赤線が受取金の關係を示し、青線が振替貸付前の掛金合計額を示してゐます。赤線全部が、振替貸付にしないで満期になつた場合の受取金總額一二、四五一円四〇銭です。即ち掛金を掛け続けた場合にはこれだけ受取ることが出来るのですが、例へば十年拂込後振替貸付にすると貸付金元利合計が三、六七七円三八銭となりますから、之れを前記の受取金一二、四五一円四

○欄から差引いた八、七七四円〇二銭が、満期となった場合の受取金合計になります。上の表の「受取金合計」欄の金額に當ります。

以上で振替貸付の何ものたるかは判つたこと、思ひますから、第八十一頁から八十三頁までの間に於て振替貸付の應用例を二三述べてみませう。

第八十一頁の「正味手取金一萬圓保険」の意味を説明します。幾年か掛金した後振替貸付にして満期となった場合、正味手取金（保険金と満期及満期後配當との合計から振替貸付金元利合計を差引いた金額）が保険金一萬圓と同額になる場合がある筈です。例へば第八十一頁の表を見ますと、二十五歳加入三十年満期では十二年掛金すれば満期の正味手取金が一萬圓になることが判ります。即ち、満期まで掛けなくても一萬圓受取ることが出来るわけですから、これを「正味手取金一萬圓保険」と稱するのです。

第八十一頁の表は毎年拂の場合と割引一時拂の場合に就いて計算してありますが、先づ毎年拂の方から説明します。この場合は十二年掛金して十三年目から振替貸付にしますと、第三十年末即ち満期には貸付金元利合計が二、四六一円四二銭となり、満期保険金と満期配當の合計額一〇、四五五円二六銭から右の元利合計二、四六一円四二銭を引いた七、九九三円八四銭が満期受取金で、これに満期後四年間の配當金一、九九六円一四銭を加へますと、正味手取金は九、九八九円九八銭即ち一萬圓に一〇円〇二銭不足するだけで大體に於て手取金は一萬圓となります。表の下部の

正味手取金
一萬圓保険
(圖鑑八一頁)

欄内に掲げてある金額が夫れです。

次に割引一時拂の場合ですが、割引一時拂については、圖鑑第九十四頁から一〇一頁までの間の解説に譲り、こゝでは既に割引一時拂を熟知のものとして説明します。さて加入の時に一時拂十二年分の保険料三、二五九円一銭を拂込み、十三年目から振替貸付にしますと、十三年以後の掛金は毎年拂の掛金と同じですから、貸付金の元利合計も正味手取金も毎年拂の場合と同じになります。

然し正味掛金は表中最下部の欄に比較してあるやうに、毎年拂と一時拂とでは一、〇〇〇圓近く違つて來ます。先づ毎年拂の掛金を見ますと十二年間の掛金合計は三、七二二円二銭で、『途中死亡の場合の正味掛金欄』中第十二年目のところにある金額に當り、十三年以降満期までの正味掛金ともなるわけです。

ところが、一時拂の方は計算が少し複雑になります。即ち第六年目から十二年目まで利益配當を受取るし、途中死亡の場合には「保険料拂戻金」欄の金額が支拂はれます。従つて、途中で死亡した場合には、利益配當の累計及保険料拂戻金を、一時拂保険料の三、二五九円一銭から差引いたものが正味掛金となります。表中最右端の「正味掛金」欄の金額が夫れです。

そこで、第十二年目の正味掛金を考へてみますと、保険料拂戻金は〇ですから、一時拂保険料から受取つた利益配當の累計を差引いた二、七六八円八三銭が正味掛金になり、これが更に十三年

以降満期までの正味掛金ともなるわけです。

次に、満期となった場合の正味手取金と正味掛金の関係を圖で示すと欄外のやうになります。緑色が掛金で、左端上半が割引一時拂、下半が毎年拂です。即ち一時拂の保険料は三、二五九円一錢ですが利益配當の累計を差引いた正味掛金は二、七六八円八三錢になります。又毎年拂では十二年間の掛金合計即ち正味掛金は三、七二二円一二錢です。さうして十二年で掛金を中止して振替貸付にしますから、第十三年以後の掛金は不要となります。そこで満期になると赤線のやうに満期受取金は七、九九三円八四錢となります。これに満期後配當一、九九六円一四錢を加へますと正味手取金は一萬圓（一〇〇〇二圓不足）となることを示した圖です。

二年掛一五年掛
年掛保險
(圖鑑八三頁)

第八十二、八十三頁は二年掛保險、三年掛保險、四年掛保險、五年掛保險と稱するものです。即ち振替貸付を利用すれば三十歳加入の場合は、

十年満期なら	二 年 間
十五年満期なら	三 年 間
二十年満期なら	四 年 間
二十五年満期なら	五 年 間

掛けさへすれば以後の掛金をしなくても満期まで有効に繼續出来るといふ意味を表はしたものです。そこで、この表の見方を二年掛保險について説明しますと、三十歳加入十年満期では二年間

振替貸付他
社との比較
(圖鑑八四頁)

毎年一、〇五七円五〇錢づゝ掛け、三年目から十年目までは振替貸付にしますから掛金不要、満期になれば、赤字のやうに現金配當がきます。従つて途中死亡又は満期の時の受取金は「死亡満期受取金」欄のやうになり、満期後四年間の配當を加へますと、満期後四年の行の下にあるやうになります。受取金の計算方法は圖鑑第七十八頁（本解説書第七四頁）と同様です。

安田生命の振替貸付は以上の通りですが、これを他社と比較したらどうなるかを第八十四頁から八十八頁までの間で研究してみませう。

先づ、第八十四頁では主要七社の三十歳加入三十年満期について次の二つの比較を試みてあります。即ち、

(1) 何年掛れば満期まで有効か

圖のやうに安田生命は五年半掛けさへすれば満期まで有効ですが、三井は六年、第一、千代田、明治、帝國は夫々七年、日本は九年も掛けなければなりません。

(2) 六年拂込めば何年繼續出来るか

圖を見ますと、六年拂込めば安田と三井は満期まで有効ですが、満期手取金を比較しますと、最初契約の保険金一萬圓に對し、安田は五、一九九円四九錢、三井は三、七五八円三〇錢で非常に大きな差があります。又、第一は十一年間、千代田、明治は七年間、日本、帝國は四年間しか有効ではありません。

斯様に同じ振替貸付でも、会社によつて非常な相違のあることが判つたこと、思ひます。

【註】 この二表の計算に使つた各社の保険種類は三井、明治、帝國は新種養老、千代田は乙種養老、第一及日本は普通養老です。

七年拂込後
振替貸付の
手取金比較
（圖鑑八五頁
より八八頁
まで）

次の第八十五頁から八十八頁までは、三十歳加入三十年満期保険金一萬圓を七年拂込後振替貸付にした場合の比較で、保険種類は前註の通りですが、住友は毎年配當附養老を採つてあります。この表には解約返戻金を掲げ振替貸付金元利合計と比較對照するに便利なやうにしてあります。

【註】 解約返戻金を示した理由は、振替貸付はその元利合計が解約返戻金の範囲内であればならないからです。また安田、住友兩社を除いた各社の解約返戻金には特に前年度末といふことを表示してあります。それは振替貸付の元利合計が前年度末の解約返戻金の範囲内であればならないからです。例へば表中日本生命八年目の元利合計二九一円一五五は、七年度末の解約返戻金八六四円以内でなければならぬのです。従つて、こゝに掲げてある解約返戻金は何れも前年度末のものです。

これに反し安田生命八年目の元利合計三二〇円五九五は、八年度末の解約返戻金一、三〇〇円以内であればよいわけで非常に有利です。住友生命もこれと同じです。

この表の見方は、圖鑑第七十八頁（本解説書第七四頁）と同様ですから別に説明の必要はないと思ひますが、表の下欄には満期正味手取金と掛金合計を示し、差引正味利得金（正味利得金については本解説書第五六頁参照）を掲げ、更にこれを表の上部に圖で示してあります。圖の赤線が満期正味手取金で青線が掛金合計です。従つて、その差が正味利得金となります。日本生命は表の通

振替貸付と
延長保険の
説明
（圖鑑八九頁）

り第十五年度の振替貸付金元利合計が解約返戻金よりも多くなりますから、十五年目以降振替貸付不能といふこととなります。

これで振替貸付の説明は終りましたが、この振替貸付は次に述べる延長保険と間違ひ易いものです。それは共に效力を延長するといふ點に於て共通してゐるからですが、然し兩方共全く異つた制度なのです。この二つの制度の區別は第八十九頁の圖でハッキリ判り易く説明することが出来ます。

この圖は振替貸付を青自動車、延長保険を赤自動車で現はしてあります。振替貸付自動車は加入後五年半目から、又延長保険自動車は十二年目から乗車すれば、以後は掛金を拂込まないでも満期に到達することが出来ます。圖の説明は自動車と同じ色分けて下の方から上の方に向つて順次に書いてありますから読んで戴けばよく判ります。

III 延長 保 險

延長 保 險
（圖鑑九〇頁
より九三頁ま
で）
延長 保 險 と
は ど ん な も
の か
（圖鑑九〇頁）

延長保険とはどんなものかといふことを一口に言ひますと、加入者が掛金の拂込を怠つた場合最初に契約した保険金額を變更しないで、或る期間效力を延長せしめる制度です。現在我國で延長保険を實行してゐる會社は安田、日本、明治、大同の四社しかありませんが、自働的に延長保険にする會社と、さうでない會社とがあります。安田と明治は前者に屬するもので自働的に延長

保険となります。そこで安田生命の延長保険の特質を摘記しますと左の通りです。

- 一、自動的なること（特に反対の申出ある時を除く）
- 二、延長期間は一年以上なること
- 三、延長保険に變更後でも一年以内ならば、原契約に直すことが出来る
- 四、貸付金のある場合には保険金額が減額される

前に延長保険は最初に契約した保険金額を變更しないで効力を延長する制度と述べましたが、その効力の續く年限即ち延長期間には一定の限度がありまして、その期間内に死亡した場合には何時でも加入當時の保険金全額を支拂つて呉れます。このやうに、保険料の拂込がないに拘はらず、一定の期間中保険金全額を支拂ふのでありますから、その代りその延長期間が過ぎてしまへばその保険は全然効力を失つてしまふわけでありませぬ。

ところが、その延長期間が満期まで續いた場合にはどうなるかと言ひますと、保険金は支拂はれませんが生存保険金といふものが支拂はれます。これ等のことに就いては圖鑑第九十一頁に圖解してありますから、第九十頁の延長保険に關する計算の説明を終つてから詳しく解説することゝいたします。

さて、延長保険は變更當時の解約返戻金を基礎として延長期間や生存保険金を計算するものでありますが、その研究の豫備知識として定期保険と生存保険に就いて知つて置かねばなりません。

延長保険の計算
(圖鑑九〇頁)

定期保険は保険期間内に被保険者が死亡した場合にのみ保険金を支拂ひ、満期になると保険金を支拂ひません。火災保険と同じやうに掛金は掛捨てとなるものです。

生存保険は定期保険と全然反対で、保険期間中に死亡した場合には保険金を支拂ひませんが、満期になつた場合には保険金を支拂ふ仕組みです。

そこで延長保険計算の説明に移ります。延長保険に於ては、その保険金額は原契約の保険金額に等しいのですから、先に拂濟證券（本解説書第七〇頁参照）の時に、保険期間が先にきまつてゐる保険金額があとからきまるのと丁度逆になるわけで、延長保険では變更するときの解約返戻金をもとにして保険期間を定めればよいわけです。即ち解約返戻金を一時拂純保険料に充當して、原契約と同額の保険金を得ることの出来るやうに期間の方を割り出すのです。さうして算出された或る一定の年限の間だけの死亡には、最初契約したと同額の保険金が支拂はれることになりませぬ。その期間の計算方法は複雑ですから省略します。然しその期間が原契約の満期時まで續いた場合、即ち前述の解約返戻金が、これから満期まで原契約と同額の保険金に對する定期保険の一時拂純保険料より多い場合には、その多い部分だけの解約返戻金を以て、延長保険に變更と同時に生存保険の一時拂純保険料に充當して生存保険をつけて置くのです。さうして、満期になつた時その生存保険金を支拂ひます。即ち、延長保険に變更と同時に途中死亡に對しては定期保険を、又満期には生存保険金を支拂ふために生存保険を一緒につけて置くことになるのです。

第九十頁の計算例は三十歳の時三十年満期一萬圓に加入して十五年後延長保険に變更した場合です。いま十五年拂込後の解約返戻金を調べてみますと三、三一〇円です。次に三十歳で加入して十五年後延長保険にするのですから、その時の年齢は四十五歳、又満期になる年齢は六十歳ですから、こゝにつける定期保険は四十五歳加入十五年満期といふことになります。そこで定期保険一萬圓の一時拂純保険料を計算しますと二、一九六円一〇銭になります。解約返戻金の方がこの一時拂純保険料よりも多くなつてゐますから、この定期保険は満期まで有効に続きます。即ち満期の前日までの間で死亡すれば、何時でも保険金一萬圓が支拂はれます。

次に解約返戻金から定期保険の一時拂純保険料を引いた残金一、一四四円九〇銭は、生存保険の一時拂純保険料に充當します。ところで、保険期間並に年齢は前の場合と同じですから、四十五歳加入十五年満期一萬圓の一時拂純保険料は、計算の結果四、二〇〇円三〇銭といふことが判ります。従つて、一時拂純保険料四、二〇〇円三〇銭で生存保険金が一萬圓ですから、一、一四四円九〇銭では幾らの生存保険金になるかといふことが判ればよいわけですから、次の比例式が成り立ちます。

$$4,200.30 : 1,114.90 = 10,000.00 : x$$

$$x = 2,650円$$

この比例式を計算の結果二、六五〇円といふ答を得ましたが、これが生存保険金で満期まで生存した場合に受取る金です。

延長保険の
圖解
(圖九一頁)

第九十一頁の圖は三十歳加入三十年満期保険金一萬圓を延長保険にした場合を、拂込年數別に示したものです。例へば四年掛ければ四年八月有効、十二年掛ければ満期まで有効といふやうに見て行きます。第二欄の青線は變更前の掛金合計額です。又赤線は受取保険金で、途中死亡の場合には何時でも保険金一萬圓が支拂はれます。満期となつた場合には第三欄の赤斜線のやうに生存保険金が支拂はれます。

延長保険は
何年掛ければ
満期まで
有効か
(圖九二頁)

次には、一體最短何年掛けて延長保険にすれば満期まで繼續出来るか、又その時の生存保険金は幾らかといふことは誰でも知りたいことせう。この間に答へたのが第九十二頁下半分の表で、そのうち三十歳加入の分を圖にすると上半分のやうになります。圖の左側の青色は何年掛ければ満期まで有効かといふことを示し、右側の赤色は左側の拂込期間に對する満期時の生存保険金額です。例へば、保険金一萬圓の場合十年満期では二年掛ければ満期まで有効で、何時死亡しても保険金一萬圓を受取り、満期まで生存すれば満期の時に九八〇円の生存保険金を受取ることが出来ます。

延長保険他
社との比較
(圖九三頁)

例によつて安田生命の延長保険を日本、明治兩社と比較してみますと第九十三頁の圖のやうになります。眞中の太い數字は經過年數即ち掛金を拂込んだ年數で、左側がこの經過年數に對する延長期間、右側が生存保険金です。この圖によつても安田生命の延長保険が他社に較べて非常に優つてゐることが判ります。

保険料の一時拂

(圖鑑九四頁より一〇一頁まで)

割引法と生存法

(圖鑑九九頁参照)

IV 保険料の一時拂

保険料の一時拂には割引法と生存法とがあります。安田生命、帝國生命は前者に属するものですが、左に割引法と生存法との區別を明かにして置きましょう。

(イ) 割引法といふのは、保険料を一時に拂込む場合、年拂保険料を基準として一定の複利で割引する方法です。例へば安田生命では年五分の複利で割引します。即ち會社では受取つた一時拂保険料を年五分の複利で利殖しながら、毎年保険料の拂込期日にその預つた保険料の元利合計額の中から保険料を支拂つて行くのです。従つて加入者の拂ふ保険料はその割引利率だけ安くなるわけですが、詳しい説明は後に譲ります。

割引法と生存法の優劣

(ロ) 生存法といふのは、割引法が年拂保険料を基準にするのと全然異り、年拂保険料とは全然別個に一時拂保険料を計算するもので、その計算方法を簡単に説明すれば、豫定利率と死亡生残表とを基として算出します。先づ死亡生残表によつて死亡者に對して將來支拂はねばならぬ保険金を豫め算出し、その保険金の契約當時に於ける現價を、契約當時に於ける生存者で負擔するやう保険料をきめるわけです。この方法によれば保険料は掛けつ放しで、途中死亡の場合でも未経過年度に属する保険料を返して貰ふといふわけには行きません。割引法と生存法との間には色々違つた點がありますから、これを表にしてみました。

割引法

生存法

(A) 途中死亡の場合には、その時に會社で預つてゐる將來の一時拂保険料を返す

返さない

(詳細は本解説書第九〇頁参照)

(B) 何年分でも自由に掛けることが出来る

保険期間全部に對するものしか一時拂とすることが出来ぬ

(C) 利益配當は年拂の場合と同様に年拂保険料に比例して配當されるから金額は年拂の場合と同じ。

一時拂保険料又は保険料積立金に比例する

さて安田生命の割引一時拂とはどんなものであるかといふことは、第九十四頁から九十七頁までの間に示してあります。第九十四頁は割引一時拂保険料の分解即ち一時拂保険料計算の原理、並びに積立方法に就いて説明したものです。

(1) 割引一時拂保険料の分解

年度の次の欄の六八六円は二十五歳加入十五年満期保険金一萬圓の年拂保険料です。こゝでは利益配當のことは考へに入れませんが、毎年六八六円づゝ保険料を拂込んで行かなければなりません。この年々の保険料を五分の複利で割引するので、次の欄に掲げてある五分の複利

割引一時拂保険料の分解

(圖鑑九四頁)

現價（現價については本解説書第五二頁参照）を年拂保険料に掛けたものがその次の欄にある割引保険料になります。即ち表の最右端に示してあるやうな計算を行つて、第一年度の割引保険料は六八六円、第二年度は六五三円三三銭といふことが判ります。この割引保険料を第一年度から第十五年度までを合計しますと、七、四七六円五〇銭（一〇銭未満切上げ）となります。これが求むる所の割引一時拂保険料です。

(2) 割引一時拂保険料の積立方法

次には、この割引一時拂保険料七、四七六円五〇銭はどう処分されて行くかと言ひますと、会社ではこの一時拂保険料を受取ると同時に六八六円は第一回の保険料に掛けてしまひますから、第一年度始には差引六、七九〇円五〇銭残ります。これを年五分で利殖しますと第一年度末には元利合計が七、一三〇円〇三銭になります。これが第一年末に死亡した場合の保険料拂戻金となるわけです。

第二年度始に再び第一年末の元利合計の中から第二回分の年拂保険料六八六円を差引いて、残りの六、四四四円〇三銭を年五分で利殖しますから、第二年末の元利合計は六、七六六円二三銭となります。斯様に順次繰返して行きますと、第十四年度末の元利合計は年拂保険料の六八六円と同額になりますから、第十五年度目には差引残高〇となつてしまひます。即ち十五年間に五分の複利で利殖しながら掛け終つたわけです。又若し途中で死亡した際には各年度末の元利合計が保険料

割引一時拂
保険料の積
立方法
(圖鑑九四頁)

拂戻金となるのです。

【註】 この年度末の元利合計は、換言すれば次年度以降の分に屬する一時拂保険料の現價に當るのです。従つて、この計算に於て年拂保険料六八六円に五分の期首拂年金現價（保険期間より經過年數を差引いた年數に對する）を掛けたものと同額になります。

右に述べた保険料拂戻金は年度末に死亡した場合の話で、年度の央で死亡した場合にはその時点までの元利合計を支拂ふことになります。

これまでに説明した割引一時拂保険料の分解と積立方法を圖で示したのが第九十五頁です。今一度前に述べた解説を読み直しながらこの圖を見て戴けば、圖の意味がハッキリ判りますから解説は省略します。

然し、今までの計算には利益配當を一切考へに入れてありませんでしたが、この一時拂には毎年拂の場合と同じやうに、第六年目から年拂保険料の五分累加配當が現金で支拂はれます。即ち圖の左下に赤線で示してあるのが夫れです。この配當金額を毎年拂の配當金を較べて見れば同じものであることが判ります。

第九十六頁は二十五歳加入二十五年満期保険金一萬圓に對する保険料割引一時拂の實際を示したものです。一時拂保険料は六、〇九五円六〇銭で、その利益配當は年拂保険料の五分累加です。この利益配當は現金で配當されますから年三分五厘で利殖しますと「利益配當金元利合計總額」

割引一時拂
の圖解
(圖鑑九五頁)

割引一時拂
の利益配當
(圖鑑九五頁)

割引一時拂
の實際
(圖鑑九六、
九七頁)

欄のやうになります。保険料拂戻金はその次の欄の通りになりますから、途中で死亡した場合に利益配當の元利合計と、この保険料拂戻金と、保険金一萬圓との合計額が受取金總額になるわけです。又満期の場合の受取金總額は保険金一萬圓と、利益配當元利合計と、満期後配當の満期時現價との合計額一七、八五二円一九錢です。この場合、保険料拂戻金がありませんが、第二十五年目及満期に保険料拂戻金のないことは前述したことによつてお判りのことと思ひます。第九十六頁の表を圖で示したのが第九十七頁です。赤線は保険金、緑線は保険料拂戻金、赤斜線は利益配當金の元利合計で、この三つを合計したものが受取金總額になります。

一時拂・日本生命との比較
(圖鑑九八、九九頁)

次に他社との比較を試みませう。第九十八頁は日本生命との比較ですが、これは又一面割引法と生存法との優劣を比較することにもなります。日本生命は生存法で、その配當金は保険料積立金の三分一厘五毛です。この利益配當の累計と保険金一萬圓の合計額が、途中死亡又は満期の受取金總額です。安田生命は前述のやうに保険料拂戻金がありますから、これに保険金と利益配當累計額を加へたものが受取金になります。表中赤字で示した分が兩社とも受取金です。これを圖にしたものが第九十九頁ですが、安田生命の方が遙かに有利なことが一目して判ります。

一時拂・帝國生命との比較
(圖鑑一〇一、一〇二頁)

第一〇〇頁は帝國生命との比較です。帝國生命は安田生命と同様に割引法ですが、安田の割引率は五分であるのに對し帝國は四分ですからこれだけでも安田の方が有利なわけです。ところが、帝國には利益配當(註参照)といふものがありますが安田にはありません。然し、元々安田

の割引率五分に對し帝國は四分で、既にこゝで一分の差があり、それだけ帝國の一時拂保険料は高くなつてゐるのですから、この利益配當も結局餘分に保険料を取つて置いて配當するわけでもしも有利とは言へません。寧ろ安田のやうに最初の一時拂保険料の安い方が加入者には遙かに利益です。これから述べる兩社の比較が之を雄辯に物語つてゐます。

利益配當の解説

【註】利益配當の解説。會社の資産利廻が割引一時拂に用ひた利率(帝國生命は四分)より高かつた場合、その率の差だけは現金で配當します。これを利益配當と言ひます。

例へば、圖鑑一〇〇頁帝國生命の利益配當に就いて説明しますと、先づ會社の資産利廻を五分とし、割引一時拂の割引率四分を差引いた一分が利益配當となるのです。然らば利益配當は何を標準として計算するか、換言すれば幾らの一分を配當するのであるかといふと、年始に於ける一時拂保険料の殘額の一分が利益配當となるのです。例へば、第二年度の利益配當六〇円七十一錢は、第一年度始即ち加入の時に拂込んだ一時拂保険料六、四二九円二〇錢から年拂保険料三五七円五〇錢(帝國の二十五歳加入三十年満期保険金一萬圓の年拂保険料)を差引いた六、〇七一円七〇錢の一分に當る金額です。

即ち會社はこの六、〇七一円七〇錢を他の資産と共に投資しますから、會社資産の利廻は、同時にこの一時拂保険料の利廻でもあるわけです。然るに會社の資産利廻を五分としますと、一時拂保険料の利子は豫定の四分よりも一分だけ多く儲つたのですから、その儲け分を利益配當として配當することになります。第三年度以降の利益配當も、同様な方法を繰返して行けばよいのです。

先づ、第一〇〇頁の表中帝國生命に就いて説明しますと、(1)の利益配當と(2)の利益配當との合

計額即ち(3)に掲げた配當金を毎年受取ります。これを年々累計したものが次の欄(4)の金額です。そこで、若し途中で死亡した場合には(4)の金額と(5)の保険料拂戻金と保険金一萬圓との合計額が受取金總額で、表中赤字で掲げたものが夫れです。

次に安田生命二十五歳加入三十年満期保険金一萬圓の一時拂保険料は五、六五二円六〇錢です。然るに帝國生命は保険金一萬圓に對し六、四二九円二〇錢ですから、帝國生命一萬圓の一時拂保険料を以て安田生命には一萬一千四百圓加入出來ます。一萬一千四百圓の一時拂保険料は六、四四三円九六錢ですから、これによつて安田生命の一時拂を計算しますと右側の表のやうになります。表の見方は圖鑑九八頁(本解説書第九二頁)と同様ですが、受取金總額を計算する場合の保険金は必ず一一、四〇〇円であることを忘れてはなりません。

そこで兩社の受取金總額を比較してみますと、常に安田の方が優れてゐますが、満期では安田の二〇、六八一円九〇錢に對し帝國は一八、五五四円三八錢ですから差引二、一二七円五二錢だけ安田の方が有利です。同じ歳に、同じ一時拂保険料で、同じ種類の保険に加入してもこんなに大きな差があるのですから、加入者としては大いに考へさせられるわけです。又同頁右端の表は兩社の保険金一萬圓に對する一時拂保険料、並に帝國一萬圓の保険料で安田には幾ら加入出來るか、また満期時の受取金總額に於て安田の方がどれだけ有利かといふことを示したものです。

第一〇〇頁で比較した安田、帝國兩社の受取金を圖にしますと第一〇一頁のやうになります。

赤線が安田、青線が帝國で、利差及利益配當の累計、保険料拂戻金の區別は圖の左上部に示してある通りです。保険金は帝國が一萬圓、安田が一萬一千四百圓ですからその差額一千四百圓だけ安田の方が常に受取保険金に於て多いわけです。従つて、圖には保険金としてその差額だけしか示してありませんから、實際の受取金總額はこの圖に示してあるものゝ合計額の外に、更に兩社共一萬圓づゝの保険金があることに注意して戴きたいのです。

V 保険金の分割拂

保険金の分割拂といふのは、豫め加入者からの請求により、支拂ふべき保険金を會社で預かつて置いて年賦、半年賦、三ヶ月賦、月賦の何れか加入者の都合のよい方法で分割して支拂ふ制度です。この制度によつて保険金の浪費が防げるばかりでなく、會社では年三分五厘で利殖して呉れますから、我々が下手な投資などして元も子も無くしてしまふやうな危険が少しもありません。従つて、生命保険有終の美を濟すものはこの保険金分割拂なのです。

この分割拂の期間は、一年から二十年までの間に於て加入者が自由に選擇することが出来るし、又一回の分割拂金は十圓以上といふことになつてゐます。

次に、分割拂には支拂開始後第三年目から利息配當がつきます。利息配當は、毎年會社の資産利廻の九割から三分五厘(分割拂計算に用ふる利率)を引いた率を、次年以後に支拂ふ割賦金の

保険金の分割
拂 (圖鑑一〇二)

決算期に於ける現價に乘じた額です。少し判りにくい言ひ廻しですが、第一〇二頁の「利息配當の計算」に就いて具體的に説明してみませう。

この計算例は保険金一萬圓を二十年間月賦で五七五〇圓づゝ受取る場合の計算です。利息配當率は前頁で説明したやうに、資産利廻を五分としその九割の四分五厘から三分五厘を引いた一分としてあります。計算表の事業年度末現價率といふのは利息配當の基をなすものですが、その計算方法は複雑ですから之れを省略します。この現價率に月賦金五七五〇圓を掛けたものが利息配當の標準となる現價です。

例へば、三年度のところを右に見て行きますと、現價率一六一・四一二五九に月賦金五七五〇圓を掛けた九、二八一円二二銭が利息配當の標準になる現價で、これに一分を掛けた九二円八一銭が第三年度に支拂ふ利息配當となります。その他の各年度の利息配當も計算方法は同様ですが、この利息配當は、割賦金支拂方法が月賦であらうと年賦であらうと、支拂方法に關係なく一度に支拂つてしまふものです。

以上で第二部即ち「どんな保険を撰ばよいか」といふことについての研究は終りましたが、これを綜合して考へてみますと、安田生命の保険はその値段に於ても、又その品質に於ても全く他社の到底企て及ばないほど優秀なものであるといふ結論に達します。「**保険に加入するならば安田生命へ**」といふことを強調して第二部の解説を終りたいと思ひます。

第二部の結論

第三部

保険金の増額方法

現在我が國では三十餘りの生命保險會社がお互に契約の獲得に鎬を削つてゐる状態です。ところが既に述べたやうに同じ保險會社でもピンからキリまであるのですから、知らず識らずのうちに不利な保険に加入してゐたり、又少し頭を働かせさへすれば思ひ掛けぬ利益があるにも拘らず之を知らずに永い年月の間損をし續けて行く加入者も相當あるのです。これ等の加入者に對し最も適切有利な保険の利用方法を教へ、充分に保險の利益を受けさせるやうにするのが、保險に理解をもつ顧客に對する奉仕として外野の聖戰に従ふ者の果すべき一大責務なのであります。

その方法については第三部に於て具體的に研究してみやうと思ひますが、然しこれは、ほんの一例に過ぎないので、實戰に當つては個々の場合について適切に指導して行くことが大切であります。

乗換の利得 (圖經一〇三頁)

第一〇三頁は「乗換の利得」に對する概念を圖で示したものです。先づ生命保險の掛金拂込を京都を出發(加入)して別府まで行く(満期)旅行にたごへてみませう。京都から別府に行くに

は、陸路を汽車で行く方法と、神戸から汽船に乗換へる方法とがあります。そこで、京都から住友生命の汽車（三十歳加入三十年満期保険金一萬圓）で出發して今（二年経過後）神戸まで来たとします。これから先の旅行を矢張り住友生命の汽車で續けて行きますと、將來の掛金は三、四二〇円四八錢要りますが、神戸から安田生命の汽船に乗換へると將來の掛金は二、四七五円三〇錢でよいのです。

従つて、神戸から汽船に乗換へた方が結局九四五円一八錢利益になるわけです。これを實際の汽車賃と汽船賃とについて比較してみても同頁右下のやうになります。これで乗換の利得についてはお判りのことと思ひますが、これは前にも述べたやうに概念的なものですから、以下順を追つて具體的な方法について述べることに致します。

一、拂濟保険利用の保険金増額方法

先づ拂濟保険を利用して保険金を増額する方法を實例によつて説明しますが、この方法は拂濟保険に對して利益配當のある場合に於て、特にその妙味を發揮することが出来ます。

第一〇四頁は第一生命三十歳加入三十年満期保険金一萬圓を五年間拂込後拂濟保険となし、新たに安田生命の二十五年満期保険金一萬圓（年齢は三十五歳になつてゐる）に加入した場合の例です。

拂濟保険の増額方法
（圖鑑一〇七頁より）
（圖鑑一〇四頁まで）

第一生命の場合
（圖鑑一〇四頁、一〇五頁）

第一生命五年間の掛金合計は一、六四三円七五錢、これに對し拂濟保険金額は一、五三〇円九九錢です。拂濟後第一年目から、表中の「D社拂濟保険現金配當」欄にあるやうに二六円五一錢、三九円七六錢、五三円〇二錢と毎年現金配當があり、その翌年から満期後三年までの間は毎年六六円二八錢づゝ現金で配當されます。この配當金の合計額は一、八四二円五七錢になります。

ところが、安田生命三十五歳加入二十五年満期保険金一萬圓の掛金は次の欄「Y社正味掛金」欄の通りですが、第一生命拂濟後の現金配當を安田生命の掛金に流用しますと、差引してその次の欄のやうな掛金になり、結局満期までの正味掛金は一、九六三円六八錢でよいことになります。

次に若し途中で死亡した場合の受取保険金はどうかと言ひますと、第一生命を現在のまゝ繼續すれば受取保険金は一〇、〇〇〇円ですが、安田に轉換した場合には一一、五三〇円九九錢（安田の保険金一〇、〇〇〇円と第一の拂濟保険金一、五三〇円九九錢との合計額）となりますから、拂濟保険を利用して安田に轉換したために常に一、五三〇円九九錢だけ保険金に於て得をすることに出来ます。いま満期時の正味利得金を比較してみますと第一〇五頁下半分に掲げてあるやうに、

安田生命に轉換した場合

受取保険金	一一、五三〇円九九錢	安田の正味掛金	一、九六三円六八錢
正味掛金	三、六〇七円四三錢	第一五年間の掛金	一、六四三円七五錢
差引満期正味利得金	七、九二三円五六錢		

第一生命を継続した場合

受 取 保 險 金	一〇、〇〇〇円〇〇銭
正 味 掛 金	三、七七八円〇八銭
差引満期正味利得金	六、二二一九九二銭
といふことになりました。即ち、	
正味掛金に於て	一七〇円六五銭
満期正味利得金に於て	一、七〇一円六四銭

だけ安田生命に轉換した方が利益だといふことが判ります。第一〇五頁は以上述べたことを圖で示したものです。又第一〇四頁下部の表は保険金一萬圓に對する第一生命の拂濟保険金額と、拂濟後の現金配當總額を示したものですから、参考にして戴きたいと思ひます。

第一〇六頁は明治生命の場合ですが、これも表の見方は大體に於て第一生命の場合と同様です。然し明治生命の配當は第一生命のやうな現金配當でなく、拂濟後五年毎に保険金を増額する證券配當ですから、安田生命の毎年の掛金と差引することは出来ません。又途中死亡の場合の受取金合計額は五年毎に證券配當の金額だけ増加して行きます。この二つの點が第一生命の場合と異なるだけですから、表の説明を省略して、満期正味利得金を比較してみますと、同頁右側の下の計算のやうに、

明治生命の
場合
(圖鑑一〇六頁)

千代田生命
の場合
(圖鑑一〇七頁)

安田生命に轉換の場合	六、一五五円六〇銭
明治生命を継続の場合	三、二五〇円九〇銭
差引安田生命に轉換の利益	二、九〇四円七〇銭
となります。又右側上の表は保険金一萬圓に對する拂濟保険金額と、満期時に於ける證券配當の合計額を示したものです。	

第一〇七頁は千代田生命の場合です。千代田には拂濟後の配當がありません。従つて、千代田生命(三十歳加入三十年満期保険金一萬圓)を三年拂込後拂濟保險にして安田に加入(三十三歳加入三十年満期保険金一萬圓)した場合には、表のやうに安田に轉換した場合の正味掛金は、安田に新しく加入した保險の正味掛金二、五〇六円三五銭に、千代田三年間の掛金一、〇六二円三五銭を加へた三、五六八円七〇銭となります。これに反し千代田をそのまゝ繼續すると正味掛金は四、五二二円二六銭ですから、安田に轉換した方が掛金に於て九五三円五六銭利益であるばかりでなく、満期の正味利得金について見ても同頁右下の計算のやうに、

安田生命に轉換の場合	七、四五一円三〇銭
千代田生命を継続の場合	五、四七七円七四銭
差引安田生命に轉換の利益	一、九七三円五六銭
となります。又右側上の表は保険金一萬圓に對する拂濟保険金額を示したものです。	

振替貸付の利付
増額保付
方法

（頁一〇八）
（頁一〇九）
（頁一〇八）
（頁一〇九）
千鳥掛

二、振替貸付利用の保険金増額方法

次には振替貸付を利用して保険金を増額する方法について述べます。
先づ最初に「千鳥掛」といふ方法を紹介します。千鳥掛といふのは他社の保険を拂済にしたり解約したりするものではなく、兩者共各々振替貸付制度を利用する方法で、先づ初めにA社を振替貸付にしてその間はB社の方を掛け、その翌年にはB社を振替貸付にしてA社の方を掛けるこいふ方法を繰返して行くのです。

例へば、第一〇八頁は第一生命（三十歳加入三十年満期保険金一萬圓）を加入後六年目に、新たに安田生命（三十五歳加入三十年満期保険金一萬圓）に加入して兩方を千鳥掛した場合の例です。この場合には先づ四年間安田生命に掛けます。その間は第一生命の方を振替貸付にする。第五年目には第一生命の方を掛けて安田生命を振替貸付にする。こいふやうに毎年兩方を代る代る掛けて行きます。さうすると、兩者共振替貸付の元利合計は表中「振替貸付元利合計」欄のやうな金額になつて行きます。保険金（第一生命は死亡後の配當を含む）からこの振替貸付金の元利合計を差引いたものが途中死亡又は満期の手取金で、表中「途中死亡・満期手取金」欄にある赤字の金額が夫れです。この二つを合計したものが最右端にある「兩契約の手取金合計」欄の金額で、これが千鳥掛にした場合の途中死亡又は満期の手取金となります。

これを見ますと、掛金は千鳥掛にしても殆んど一口の掛金と異ならないに拘らず、常に二口の保険を持つこととなり、満期になつても一萬圓以上の金が手に入るので、保険金増額の方法としては非常によい手段と言ふことが出来ます。以上述べたことを圖にしますと第一〇九頁のやうになります。

次の第一一〇頁は矢張り振替貸付を利用して保険金を増額する方法ですが、この場合は一つだけ振替貸付にするのです。例へば、住友生命（三十歳加入三十年満期保険金一萬圓）を七年拂込んで八年目から満期まで振替貸付にして、新たに安田生命（三十七歳加入二十五年満期保険金一萬圓）に加入しますと、住友生命の振替貸付元利合計は表中「振替貸付元利合計」欄のやうになります。従つて、途中死亡又は満期の受取金はその次の欄のやうになります。これに安田生命の保険金一萬圓を加へたものが途中死亡の場合の受取金で、満期の時には更にこれに満期後配當を加へたものが受取金となります。即ち表中最右端の欄のやうに一九、七三六円七八乃至一三、七〇八円二〇が受取金合計額です。

斯様に、住友生命をその儘繼續するよりも、この方法によつた方が常に多額の保険金を受取る事が出来ます。従つて、兩者の掛金を計算に入れても満期の時の正味利得金は、同頁下部に掲げた計算のやうに安田に轉換した方が遙かに有利です。以上述べたことを圖で示しますと、第一一頁のやうになります。

住友生命の
場合
（頁一一一）
（頁一一二）

帝國生命、三井生命の
場合
（圖鑑一頁）
（二、一一三）
解約返戻金の
利用の
方法
（圖鑑一四頁）
（節減）

第一一二頁は帝國生命を加入後八年目から、又第一一三頁は三井生命を十年目から夫々振替貸付にして安田生命に新しく加入した場合の例ですが、表の見方等全く住友生命の場合と同様ですから省略します。

三、解約返戻金利用の掛金節減方法

最後に解約返戻金を利用して掛金を節減する方法を第一一四頁の圖について説明します。

三十歳の時日本生命の三十年満期保険金一萬圓に加入した契約の三年後に於ける「現在」までの掛金は、圖の「加入」から左の方へ九三九円（一ヶ年三二三百づつ）掛けたこととなります。日本生命加入の時から三年経過してゐますから、現在の加入者の年齢は三十三歳になつてゐます。この時日本生命を解約して安田生命二十五年満期保険金一萬圓に加入、圖を右の方に廻れば、安田生命の將來の掛金は三、七二八円四四錢でよいわけですが、日本生命の解約返戻金一九五円を保険料に振り當てますと、實際の掛金は三、五三三円四四錢でよいこととなります。

これに反し日本をその儘繼續すると、將來の掛金は四、八〇八円二七錢（正味掛金五、七四七円二七錢から既拂込掛金九三九円を差引いたもの）ですから、結局安田に轉換した方が將來の掛金を一、二七四円八三錢節約することが出来ます。しかも、圖の「現在」から安田に轉換、右の方へ赤線の如く進んだのと、そのまゝ日本を左の方へ青線の如く繼續したのでは、満期に到着する時

期も安田の方が二年早くなります。斯様に多額の掛金節約が出来て、更にその上早く満期になるのですから轉換の利益、思ひ半に過ぎるものがあります。

結 論

以上で第一部から第三部まで「生命保険圖鑑」の解説を全部終りましたが、我々がこの書を通じて痛切に感ずることは、

- 一、無理をしてでも必ず生命保険に加入して置かねばならないといふこと
- 二、生命保険は必ずよい會社のよい保険に加入しなければならないといふこと
- 三、生命保険は、少し頭を働かせさへすれば、保険金を増したり、掛金を減らしたりすることが出来るものであるといふことです。

そして、同じ保険に加入するなら、最も有利な、最も親切な安田生命を選ぶことが、最も我々に幸福を齎らすものであるといふ感を深うせざるを得ないのです。

生命保険圖鑑解説（終）

昭和十三年九月十日印刷
昭和十三年九月十五日發行

生命保險圖鑑解説
(生命保險圖鑑附録)
【非賣品】

發行者兼
麻生郁雄

印刷者
北川武之輔

印刷所
株式會社 細川活版所

發行所
東京市瀧野川區田端町五四二
保險經濟研究社

振替口座東京一三四三五〇番

